



## 平成22年3月期 決算短信

平成22年5月14日  
上場取引所 東 札

上場会社名 株式会社 ほくほくフィナンシャルグループ  
コード番号 8377 URL <http://www.hokuhoku-fg.co.jp/>  
代表者 (役職名) 取締役社長  
問合せ先責任者 (役職名) 企画担当取締役  
定時株主総会開催予定日 平成22年6月25日  
有価証券報告書提出予定日 平成22年6月28日

(氏名) 高木 繁雄  
(氏名) 庵 栄伸  
TEL 076-423-7331  
配当支払開始予定日 平成22年6月28日  
特定取引勘定設置の有無 有

(百万円未満切捨て)

### 1. 22年3月期の連結業績(平成21年4月1日～平成22年3月31日)

#### (1) 連結経営成績

(%表示は対前期増減率)

	経常収益		経常利益		当期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%
22年3月期	226,758	△5.4	35,413	65.5	19,212	△48.1
21年3月期	239,648	△8.3	21,399	△67.7	37,034	△4.2

	1株当たり当期純利益	潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	自己資本当期純利 益率	総資産経常利益率	経常収益経常利益 率
	円 銭	円 銭	%	%	%
22年3月期	12.66	12.14	5.1	0.4	15.6
21年3月期	24.91	22.79	10.8	0.2	8.9

(参考) 持分法投資損益 22年3月期 1百万円 21年3月期 3百万円

#### (2) 連結財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率	1株当たり純資産	連結自己資本比率 (第二基準)
	百万円	百万円	%	円 銭	%
22年3月期	10,107,208	412,324	4.1	256.94	10.83
21年3月期	9,929,086	441,664	4.4	234.56	10.81

(参考) 自己資本 22年3月期 411,543百万円 21年3月期 440,988百万円

(注)「自己資本比率」は、(期末純資産の部合計-期末少数株主持分)を期末資産の部合計で除して計算しております。  
(注)「連結自己資本比率(第二基準)」は、「銀行法第52条の25の規定に基づき、銀行持株会社が銀行持株会社及びその子会社の保有する資産等に照らしこれらの自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(平成18年金融庁告示第20号)」に基づき算出しております。

#### (3) 連結キャッシュ・フローの状況

	営業活動によるキャッシュ・フロー	投資活動によるキャッシュ・フロー	財務活動によるキャッシュ・フロー	現金及び現金同等物期末残高
	百万円	百万円	百万円	百万円
22年3月期	354,037	△280,212	△60,363	261,766
21年3月期	149,296	△44,945	△21,319	248,324

### 2. 配当の状況

	1株当たり配当金					配当金総額 (合計)	配当性向 (連結)	純資産配当 率(連結)
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計			
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	百万円	%	%
21年3月期	—	0.00	—	3.00	3.00	4,170	12.0	1.3
22年3月期	—	0.00	—	3.50	3.50	4,863	27.6	1.4
23年3月期 (予想)	—	0.00	—	3.50	3.50		30.6	

(注)上記「配当の状況」は、普通株式に係る配当の状況です。当社が発行する普通株式と権利の異なる種類株式(非上場)の配当の状況については、3ページ「種類株式の配当の状況」をご覧ください。

### 3. 23年3月期の連結業績予想(平成22年4月1日～平成23年3月31日)

(%表示は通期は対前期、第2四半期連結累計期間は対前年同四半期増減率)

	経常収益		経常利益		当期純利益		1株当たり当期純利 益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
第2四半期 連結累計期間	105,000	△8.2	14,000	4.8	8,000	38.6	5.17
通期	211,000	△6.9	32,000	△9.6	17,500	△8.9	11.43

## 4. その他

(1) 期中における重要な子会社の異動(連結範囲の変更を伴う特定子会社の異動) 無  
 新規 ー社 (社名 ) 除外 ー社 (社名 )

(2) 連結財務諸表作成に係る会計処理の原則・手続、表示方法等の変更(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項の変更)に記載されるもの)

① 会計基準等の改正に伴う変更 有

② ①以外の変更 無

(注)詳細は、23ページ「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」をご覧ください。

(3) 発行済株式数(普通株式)

① 期末発行済株式数(自己株式を含む) 22年3月期 1,391,630,146株 21年3月期 1,391,630,146株

② 期末自己株式数 22年3月期 2,125,128株 21年3月期 1,488,730株

## (参考)個別業績の概要

1. 22年3月期の個別業績(平成21年4月1日～平成22年3月31日)

(1) 個別経営成績

(%表示は対前期増減率)

	営業収益		営業利益		経常利益		当期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
22年3月期	6,639	△21.2	5,995	△22.9	5,916	△23.0	15,571	20.5
21年3月期	8,424	4.9	7,780	5.8	7,686	4.6	12,923	83.0

	1株当たり当期純利益	潜在株式調整後1株当たり当期純利益
	円 銭	円 銭
22年3月期	10.04	9.62
21年3月期	7.56	7.27

(2) 個別財政状態

	総資産		純資産		自己資本比率		1株当たり純資産	
	百万円	百万円	百万円	百万円	%	円 銭	円 銭	
22年3月期	260,675	240,310	240,310	300,945	92.2	133.69	133.80	
21年3月期	341,161	300,945	300,945		88.2			

(参考) 自己資本 22年3月期 240,310百万円 21年3月期 300,945百万円

## ※業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

上記の予想は本資料の発表日現在において入手可能な情報及び将来の業績に影響を与える不確実な要因に係る本資料発表日現在における仮定を前提としています。実際の業績は、今後様々な要因によって大きく異なる結果となる可能性があります。

「種類株式の配当の状況」

普通株式と権利関係の異なる種類株式に係る1株当たり配当金の内訳は以下のとおりです。

(基準日)	1株当たり配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	年間
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭
第1回第1種優先株式					
21年3月期	—	3 85	—	3 85	7 70
22年3月期	—	—	—	—	—
23年3月期(予想)	—	—	—	—	—
第1回第4種優先株式					
21年3月期	—	3 31	—	3 31	6 62
22年3月期	—	—	—	—	—
23年3月期(予想)	—	—	—	—	—
第1回第5種優先株式					
21年3月期	—	7 50	—	7 50	15 00
22年3月期	—	7 50	—	7 50	15 00
23年3月期(予想)	—	7 50	—	7 50	15 00

(注) 第1回第1種優先株式及び第1回第4種優先株式については、全株式を取得し消却したため、22年3月期及び23年3月期(予想)の配当はありません。

## 1. 経営成績

### (1) 経営成績に関する分析

当連結会計年度のわが国経済は、生産活動の回復が続いたほか、政府の経済対策による個人消費の下支え効果などが持続したこともあり、しだいに持ち直しの動きが見られるようになりました。

金融面では、海外の株価が堅調に推移する中、年度末にかけて外国為替相場の円高が一服したこともあり、日経平均株価は1万1千円台を回復しました。また、金融政策面では金融緩和の姿勢が維持されました。

一方、当社グループの主要営業地域である北陸三県においては、製造業では改善の動きがみられますが、非製造業、中小企業の業況は依然厳しく、個人消費に持ち直しの動きがあるものの弱い状況が続いております。北海道においても、輸送機械・電気機械などの生産で持ち直しの動きが続き、公共工事が増加基調で推移しましたが、民間投資活動や観光客数などが低調に推移し、持ち直しの動きは極めて緩慢なものにとどまりました。

このような環境の中、当社グループは、「地域共栄」を経営理念に掲げ、北陸銀行・北海道銀行の両行が持つノウハウ、情報、国内・海外のネットワークなどを最大限に活用し、お客さまの利便性向上に資する質の高い金融サービスを提供することで、地域経済の発展に貢献するとともに、企業価値の向上に努めてまいりました。

中小企業等、法人のお客さまには、金融円滑化への取り組みを一層強化し、資金繰り相談に応じるため年末や期末に休日も含めた相談窓口を設置したほか、政府の施策による「緊急保証融資」にも積極的に取り組み、地域経済への円滑な資金供給に努めました。また、当社グループの強みである広域地域金融グループとしての機能を活かし、ビジネスマッチングや問題解決型の金融サービスの提供、そして地域企業の海外進出支援等を引き続き積極的に行ってまいりました。販路・仕入先の拡大を狙いに、商談会等を国内各地で開催したほか、上海やバンコック等で商談会を開催し、お取引先の新たなビジネスチャンスの創出を支援いたしました。また、北陸銀行では平成21年9月にロンドン駐在員事務所を開設するとともにドイツ銀行、ベトナム銀行と業務協力に関する覚書を締結、北海道銀行においても平成21年3月に開設したユジノサハリンスク駐在員事務所が積極的な活動を開始しており、支援体制を一層充実させております。

個人のお客さまに対しましては、落ち着いた雰囲気や資産運用や住宅ローンの相談を受けられるよう「相談ブース」を整備する一方、雇用環境の変化に親身にお応えできるよう「ローン返済等に関するご相談窓口」を設置するなど、親しまれる店頭づくりに努めました。

経営効率化につきましては、引き続き経費の抑制を徹底する一方で、顧客の利便性・セキュリティ向上のための戦略的投資を行い、「MEJAR（横浜銀行、北陸銀行及び北海道銀行との3行共同利用システム）」移行に向けた体制整備に引き続き取り組んでおります。

地域貢献につきましては、本業を通じた活動として、社会問題となっている振り込め詐欺の未然防止に積極的に取り組んでおり、講師を派遣しての「出前講座」を実施する等の啓蒙活動にも取り組んでおります。芸術文化支援として、クラシックコンサート等の継続開催や、大学での寄附講座等の金融教育にも力を入れております。

また、平成10年3月、平成11年9月および平成12年3月にかけて総額1,400億3千万円の公的資金により支えていただいておりますが、経営の健全化につとめてまいりました結果、平成21年8月を以って返済を完了することができました。今後ともさらなる経営努力を続け、経営理念であります「地域共栄」の精神で地域のお客さまとともに発展していくことを目指してまいります。

この結果、当社グループの当連結会計年度の連結業績は以下のようになりました。

当連結会計年度の連結経常収益は、国債等債券売却益が増加したものの、金利低下による貸出金利息収入の減少や、外国為替取引が低調に推移し外為売買益が減少したこと等から前連結会計年度比128億円減少し2,267億円となりました。経常費用は、平成23年度更改予定のシステム投資等を主因に経費は増加いたしました。景気を持ち直しによる与信費用の減少や、有価証券関係費用が減少した結果、前連結会計年度比269億円減少し1,913億円となりました。なお、平成21年8月の公的資金の完済も勘案し、従来見送っておりました常勤役員の退職慰労金贈呈議案を株主総会に提出いたしますことから、過年度に係る退職慰労引当金繰入額を特別損失として計上しております。以上の結果、連結経常利益は前連結会計年度比140億円増加し354億円、連結当期純利益は、前連結会計年度に北陸銀行の子会社清算決定による法人税等調整額の減少により純利益が増加してはりましたが、当連結会計年度はそのような要因はなく、178億円減少の192億円となりました。

事業のセグメント別では、経常収益は銀行業で前連結会計年度比112億円減少して2,073億円、リース業で前連結会計年度比16億円減少して138億円、経常利益は銀行業で前連結会計年度比159億円増加して340億円、リース業で前連結会計年度比1億円減少して3億円となりました。

当社における当事業年度業績につきましては、営業収益は前事業年度比17億円減少して66億円、経常利益は前事業年度比17億円減少して59億円、当期純利益は前事業年度比26億円増加して155億円となりました。

### (2) 財政状態に関する分析

#### ① 預金・貸出金・純資産

貸出金の当連結会計年度末残高は個人ローンが順調に増加したものの事業性貸出が減少したことにより前連結会計年度末比1,519億円減少し6兆9,812億円、預金・譲渡性預金の当連結会計年度末残高は個人預金の増加を主因に前連結会計年度末比4,218億円増加の9兆833億円となりました。

また、当連結会計年度に公的資金の返済（自己株式取得及び消却）を実施しており、資本剰余金は699億円減少しております。

#### ② キャッシュ・フローの状況

i 営業活動によるキャッシュ・フローは、貸出金の減少と預金の増加を主因に前連結会計年度比2,047億円増

加し、3,540億円となりました。

ii 投資活動によるキャッシュ・フローは、有価証券の取得による支出の増加を主因に前連結会計年度比2,352億円減少し、△2,802億円となりました。

iii 財務活動によるキャッシュ・フローは、自己株式の取得（公的資金の完済）による支出の増加を主因に前連結会計年度比390億円減少し、△603億円となりました。

以上の結果、現金及び現金同等物は前連結会計年度末比134億円増加し、2,617億円となりました。

### (3) 利益配分に関する基本方針及び当期・次期の配当

当社は、傘下の銀行等グループ企業の事業の公共性を鑑み、長期にわたる経営基盤の維持・拡充に努め、安定的な配当を行うことを基本方針としております。当事業年度の業績を勘案するとともに、経営体質の改善・強化のため内部留保の蓄積にも意を用い、平成21年度の期末配当につきましては、優先株式につきましては所定の配当とし、第1回第5種優先株式は1株当たり7円50銭、普通株式につきましては1株当たり50銭増加の3円50銭として定時株主総会に議案を提出する予定であります。

なお、次期以降につきましても、上記の基本方針に則り、適切な利益配分を行ってまいります。

### (4) 事業等のリスク

以下において、当社グループの事業展開その他に関するリスク要因となる可能性のあると考えられる主な事項を記載しております。また、必ずしもそのようなリスク要因に該当しない事項についても、投資判断、あるいは当社グループの事業活動を理解する上で重要と考えられる事項については、投資者に対する積極的な情報開示の観点から記載しております。当社グループは、これらリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の対応に努める所存です。

なお、本項においては、将来に関する事項は、別段の記載の無い限り、有価証券報告書提出日現在において判断したものであります。

#### ① 地域経済の動向に影響を受けるリスク

当社グループは北陸三県、北海道を主要な営業基盤としており、与信ポートフォリオにおいても、大きな割合を占めています。これらの地域の経済状態が悪化した場合には、貸倒れの増加や担保価値の下落等により、当社グループの不良債権や与信費用が増加する可能性があります。

#### ② 自己資本比率

##### i 自己資本比率が悪化するリスク

当社グループは、連結自己資本比率を「銀行法第52条の25の規定に基づき、銀行持株会社が銀行持株会社及びその子会社の保有する資産等に照らしそれらの自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準」（平成18年金融庁告示第20号）に定められる第二基準（国内基準）以上に維持しなければなりません。また、当社の銀行子会社も、連結自己資本比率及び単体自己資本比率を「銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準」（平成18年金融庁告示第19号）に定められる国内基準以上に維持しなければなりません（現時点におけるこれらの国内基準は4%となっております。）。

当社及び銀行子会社の自己資本比率が要求される水準を下回った場合には、当局から指導や命令を受けることとなります。当社グループの自己資本比率に影響を与える要因には以下のものが含まれます。

- ・不良債権の処分際に生じうる与信関係費用の増加
- ・債務者の信用力の悪化に際して生じうる与信関係費用の増加
- ・貸出金等リスクアセットポートフォリオの変動
- ・有価証券ポートフォリオの価値の低下
- ・銀行又は銀行持株会社の自己資本比率の基準及び算定方法の変更
- ・繰延税金資産計上額の減額
- ・調達している劣後債務を同等条件の劣後債務に借り換えることの困難
- ・本項記載のその他の不利益な展開

##### ii 規制の見直し

世界的な金融危機を背景に、バーゼル銀行監督委員会ではバーゼルⅡに基づく現在の自己資本比率規制の強化策を検討しています。規制が見直された場合、自己資本比率規制がより厳しいものに改正される可能性があります。

##### iii 繰延税金資産

現時点におけるわが国の会計基準に基づき、一定の条件の下で、将来における税金負担額の軽減効果として繰延税金資産を貸借対照表に計上することが認められております。繰延税金資産の計算は、将来の課税所得に関するさまざまな予測・仮定に基づいており、実際の結果がかかる予測・仮定とは異なる可能性があります。当社グループは、将来の課税所得の予測に基づき、回収が見込まれないと判断した繰延税金資産については計上しておりませんが、将来の課税所得の予測・仮定に基づいて、当社又は子会社が繰延税金資産の一部又は全部の回収が一層困難になると判断した場合、当社グループの繰延税金資産は減額され、その結果、当社グループの業績に悪影響を与えるとともに、自己資本比率の低下を招く可能性があります。

なお、銀行及び銀行持株会社の自己資本比率告示の改正により、主要行を対象に、自己資本比率規制における自己資本のうち、基本的項目（Tier 1）に占める繰延税金資産の上限は20%と定められております。当社グループは、規制の対象ではありませんが、将来的に対象範囲が地域金融機関にも拡大される可能性があります。そ

の場合、当社グループの業績ならびに自己資本比率に影響を与える可能性があります。

iv 劣後債務

一定の要件を満たす劣後債務は、自己資本比率の算出において補完的項目として一定限度を自己資本の額に算入することができます。既存の劣後債務の自己資本への算入期限到来に際し、同等の条件の劣後債務に借り換えることができない場合、当社グループの自己資本の額は減少し、自己資本比率の低下を招く可能性があります。

③ 信用リスク

i 不良債権の状況

当社グループは、自己査定の際の厳格な適用を通じ、不良債権の適確な処理と与信集中の回避により資産の健全化を進めておりますが、景気動向や不動産価格及び株価の変動、当社グループの貸出先企業の経営状況等によっては、不良債権及び与信費用が増加する可能性があります。

ii 貸倒引当金の状況

当社グループは、貸出先の状況、差入れられた担保の価値及び経済全体に関する前提及び見積りに基づいて、貸倒引当金を計上しておりますが、実際の貸倒れが貸倒引当金計上時点における前提及び見積りと乖離した場合、貸倒引当金が不十分となる可能性があります。また、経済情勢全般の悪化による担保価値の下落やその他の予期せざる事情の発生により、貸倒引当金の積み増しが必要となる可能性があります。

iii 貸出先への対応

当社グループは、貸出先に債務不履行等が生じた場合において、回収の効率・実効性の観点から、当社グループが債権者として有する法的な権利のすべてを必ずしも実行しない場合があります。また、貸出先の支援のために債権放棄等を行う場合もあります。この結果、与信費用等が増加する可能性があります。

iv 権利行使の困難性

当社グループは、不動産市場や有価証券市場における流動性の欠如や価格の下落等の事情により、担保権を設定した不動産や有価証券の換金、または貸出先の保有する資産に対して強制執行することが事実上できない可能性があります。この場合、与信費用等が増加するとともに不良債権処理が進まない可能性があります。

④ 市場リスク

当社グループは、デリバティブを含む様々な金融商品を取り扱う市場取引及び投資活動を行っており、ポートフォリオの適性化など、適切にリスク管理を行っていますが、金利、株価及び債券相場、為替等の変動により、保有する有価証券の価値が大幅に下落した場合には減損又は評価損が発生し、業績に悪影響を与えるとともに、自己資本比率の低下を招く可能性があります。

⑤ 流動性リスク

市場環境が大きく変化した場合や、当社グループの業績悪化等で外部格付機関が当社グループの格付けを引き下げた場合、通常より著しく高い金利による資金調達を余儀なくされたり、資金繰りが悪化することにより、当社グループの業績や財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

⑥ コンプライアンスリスク

当社グループは、コンプライアンスを重要な経営課題として、規定及び体制の整備に努めておりますが、法令等遵守状況が不十分であった場合や将来的な法令等の変更により、当社グループの業務運営や業績等に悪影響を及ぼす可能性があります。

なお、現在当社グループの経営に重要な影響を及ぼす訴訟はありませんが、今後の事業活動の過程で訴訟を提起された場合、その帰趨によっては当社グループの業務運営や業績等に悪影響を及ぼす可能性があります。

⑦ 事務リスク

当社グループは、事務規定等に則った正確な事務処理を徹底しておりますが、役職員により不正確な事務、あるいは不正や過失等に起因する不適切な事務が行われることにより、当社グループに経済的損失や信用失墜等をもたらす可能性があります。

⑧ システムリスク

当社グループは、オンラインシステムや顧客情報等を蓄積する情報系システム等を保有しており、システムの停止や誤作動または不正利用等のシステムリスクに対して、日頃よりシステムの安定稼働に努め万全の体制を整備しておりますが、万一重大なシステム障害が発生した場合は、当社グループの業務運営や業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。北陸銀行と北海道銀行が平成23年5月に予定しているシステム移行において、不測の事態に起因して、システム障害が発生する可能性があります。

⑨ 顧客情報の漏洩等にかかるリスク

当社グループは膨大な顧客情報を保有しており、情報管理に関する基本方針及び管理規定等を制定し、適切な体制を構築するなど万全を期しておりますが、悪意のある第三者によるコンピュータへの侵入、役職員及び外部委託先の人為的ミス等により、顧客情報の漏洩、紛失、改ざん、不正利用等が発生した場合、顧客への損害賠償等の他、風評リスクが顕在化する等、当社グループの業務運営や業績等に悪影響を及ぼす可能性があります。

⑩ 金融犯罪にかかるリスク

キャッシュカードの偽造・盗難や、振り込め詐欺等の金融犯罪が多発しており、当社グループでは、被害の未然防止、セキュリティ強化等を実施しておりますが、金融犯罪の高度化・大規模化等により、被害を受けたお客さまへの補償や、未然防止策の費用が多額になる場合、当社グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

⑪ 風評リスク

当社グループや金融業界等に対する風説・風評が、マスコミ報道やインターネット上で発生・拡散した場合、その内容の正確性にかかわらず、当社グループの業務運営や業績及び財務状況、ないしは当社の株価に悪影響を及ぼす可能性があります。

⑫ 災害等のリスク

地震・風水害等の自然災害、停電・交通マヒ等の社会的インフラ障害、大規模な犯罪・テロ行為、新型インフルエンザ等感染症の世界的流行等の外部要因により、当社グループの業務運営に支障を来す可能性があります。

かかる緊急事態に備え、コンティンジェンシープランを策定し、緊急事態の種類別に対応策を整備しておりますが、被害の程度により、当社グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

⑬ 退職給付債務

当社グループの年金資産の時価が下落した場合、当社グループの年金資産の運用利回りが低下した場合、又は予定給付債務を計算する前提となる保険数理上の前提・仮定に変更があった場合等には、費用及び計上される債務に悪影響を与える可能性があります。金利環境の変動その他の要因も年金の未積立債務および年間積立額にマイナスの影響を与える可能性があります。また、制度内容の変更により未認識の過去勤務債務が発生する可能性があります。

⑭ 固定資産減損

当社グループが保有する固定資産については、「固定資産の減損に係る会計基準」（企業会計審議会）を適用しております。市場価格の著しい下落、使用範囲又は方法の変更、収益性の低下等により固定資産の減損損失を計上することになる場合、当社グループの業績や財務内容に悪影響を及ぼす可能性があります。

⑮ 規制変更のリスク

当社グループは、現時点の規制（法律、規則、政策、会計制度、実務慣行等）に従って業務を遂行しております。このため将来における規制変更が当社グループの業務運営や業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

特に、将来の会計制度等の変更内容や対応によってはコストの増加につながる可能性があります。

⑯ 持株会社のリスク

当社は銀行持株会社ですので、当社の収入の大部分は当社が直接保有している銀行子会社等が当社に対して支払う配当からなっております。一定の状況下では、様々な規制上の制限等により、当社の銀行子会社等が当社に支払うことができる配当の金額が制限される可能性があります。また、銀行子会社等が十分な利益を計上することができず、当社に対して配当を支払えない状況が生じた場合には、当社は配当を支払えなくなる可能性があります。

⑰ ビジネス戦略が奏功しないリスク

当社グループは、収益力強化のために様々なビジネス戦略を実施していますが、以下に述べるものをはじめとする様々な要因が生じた場合には、当初想定していた成果を生まない可能性があります。

- ・貸出ボリュームの増大が期待通り進まないこと
- ・既存の貸出について期待通りの利鞘拡大が進まないこと
- ・競争状況や市場環境により、収益が期待通りの成果とならないこと
- ・銀行子会社が競合するゆうちょ銀行への規制が変更され、業容が拡大することにより競争激化が進むこと
- ・経費削減等の効率化が期待通りに進まないこと
- ・リスク管理での想定を超える市場の変動等により、有価証券運用が期待通りの成果を挙げられないこと
- ・業務範囲の拡大等に伴う新たなリスクが発生すること
- ・当社グループ内外でのシステム統合が期待通り進まない、あるいは期待通りの成果を挙げられないこと
- ・有能な人材の確保ができなくなること

⑱ 内部統制の構築等にかかるリスク

金融商品取引法に基づき、平成21年3月期から財務報告にかかる内部統制報告書の開示が義務づけられました。

当社グループは、これに対応するため、従来にも増して当社グループの業務を適切にモニターし、管理するための有効な内部統制の構築・維持・運営に努めておりますが、構築した内部統制システムが結果的に十分機能していなかったと評価されるおそれも払拭できません。また、予期しない問題が発生した場合等において、想定外の損失、訴訟、政府当局による何らかの措置、処分等が発生し、その結果、財務報告にかかる内部統制の有効性評価に一定の限定を付したり、内部統制の重大な欠陥について報告したりすることを余儀なくされる可能性もあります。

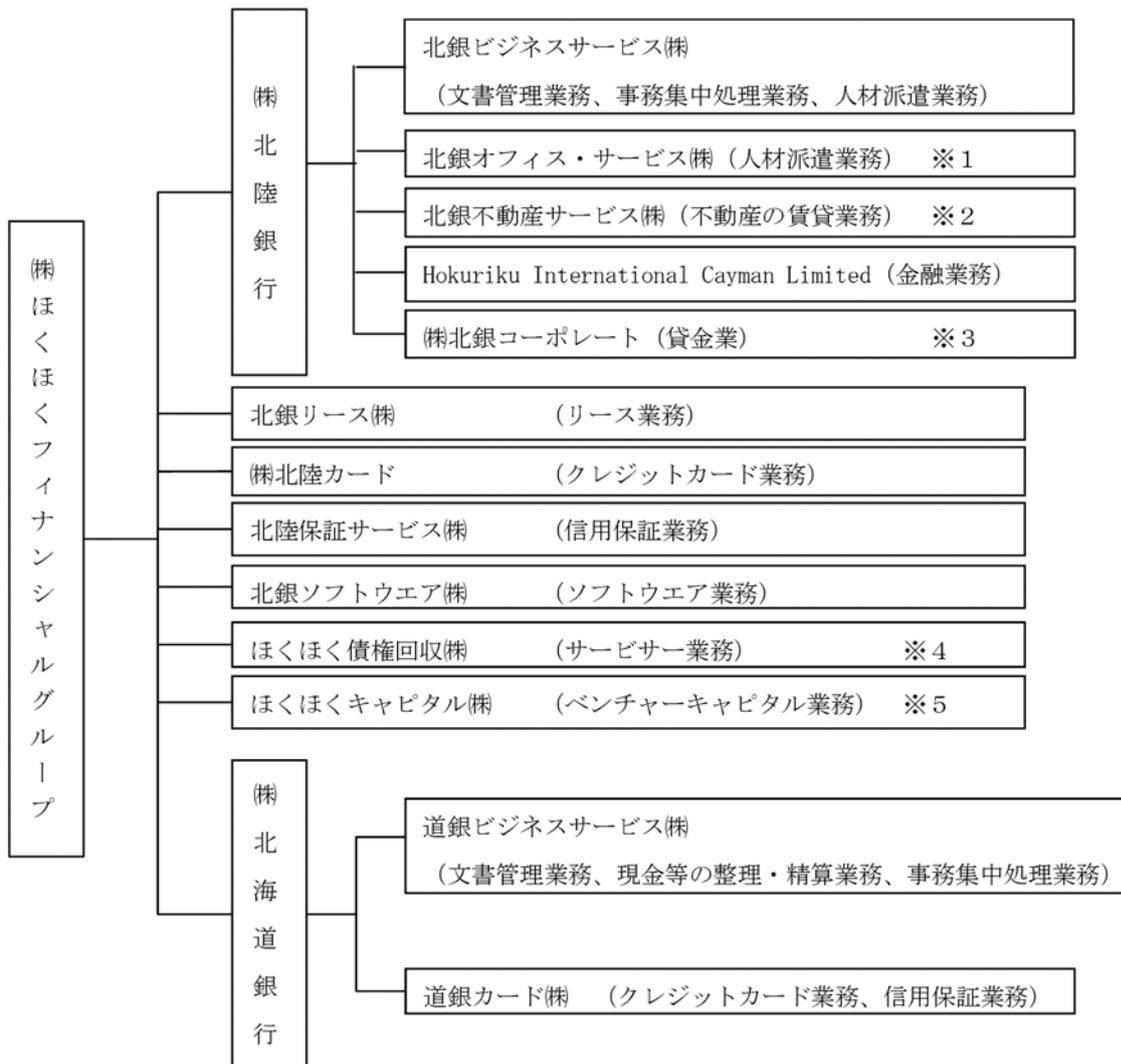
かかる事態が発生した場合、当社グループに対する市場の評価の低下等、当社グループの業務運営や業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

## 2. 企業集団の状況

当社グループは、当社、連結子会社14社及び関連会社1社で構成され、北海道、北陸三県、東京・名古屋・大阪の三大都市圏に拠点を持つ広域地域金融グループを形成しております。また、北陸銀行と北海道銀行を中核に、リース、クレジットカード、ベンチャーキャピタル、ソフトウェア開発、サービサー業務等、広範なニーズに対応する総合的な金融サービス機能を有しております。

事業系統は次のとおりであります。

事業系統図



※1 平成21年6月24日に清算を結了しております。

※2 平成22年3月25日に㈱北陸銀行が吸収合併しました。

※3 平成21年9月30日に清算を結了しております。

※4 日本海債権回収㈱から社名変更しております。

※5 関連会社であります。

### 3. 経営方針

#### (1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、北陸銀行と北海道銀行を中核に、幅広い金融ニーズに対応すべく総合金融サービス機能を高め、北陸三県および北海道を主要営業エリアとして三大都市圏にも有するネットワークを活用し、地域社会の発展と活性化に貢献することを通じ、企業価値の向上に努めてまいりたいと考えております。

#### 【経営理念】

広域地域金融グループとしてのネットワークと総合的な金融サービス機能を活用して、地域とお客さまの繁栄に貢献し、ともに発展しつづけます。

「地域共栄」	「公正堅実」	「進取創造」
社会的使命を実践し、地域社会とお客さまとともに発展します。	公正かつ堅実な経営による健全な企業活動を目指し、信頼に応えます。	創造と革新を迫及し、活力ある職場から魅力あるサービスを提供します。

#### (2) 目標とする経営指標

平成22年度から3年間に渡る中期経営計画を新たに作成しており、平成25年3月期までの目標として、以下の水準を目指してまいります。

目標とする経営指標	平成22年3月期実績	平成25年3月期目標
コア業務純益 ※1	664億円	700億円
連結当期純利益 ※2	192億円	255億円
ROA (コア業務純益ベース) ※1	0.68%	0.68%
OHR (経費÷コア業務粗利益) ※1	58.68%	58%
連結自己資本比率 ※2	10.83%	11.5%以上

※1 北陸銀行と北海道銀行の2行合算ベース

※2 当社連結ベース

#### (3) 中長期的な会社の経営戦略

グループ各社は、地元営業地域に経営資源を集中し、リテール強化に向けた体制を整備・拡充することを目指し、以下のグループ基本戦略を掲げております。

営業力の強化	「Retail (リテール) ～親しまれる～」 「Relation (リレーション) ～頼りにされる～」 「Region (リージョン) ～地域密着～」 ”トリプルR”の実践により営業力を強化	◆収益基盤の拡充・強化 ◆お客さま目線でのコンサルティング ◆有価証券運用の拡大
経営の効率化	新システムの安定稼働に向けて万全な態勢をとるほか、システムの戦略的活用により、グループのシナジー効果を加速化させていく。	■MEJARの安定稼働・戦略的活用 ■シナジー効果の更なる追求 ■営業人員の増強
経営基盤の安定化	新自己資本比率規制の動向もにらみながら、収益の積み上げによる自己資本の質の向上を図り、収益状況に応じて、普通株式の段階的増配を目指していく。	●資本の質の向上 ●普通株式の段階的増配

(4) 会社の対処すべき課題

現在、当社を取り巻く経営環境は、マーケットの縮小と競争の激化に加え、不透明な経済環境を反映しリスクの増大も懸念され、従来にも増して困難な状況と認識しております。

厳しい経営環境の中、これからの3年間を「持続的成長に向けた新たな挑戦の期間」と位置付け、新しい中期経営計画“Road to 10”を策定いたしました。従来から取り組んできた経営の3つの柱「営業力の強化」「経営の効率化」「経営基盤の安定化」を更に進め、公的資金完済後の経営ステージにあわせた施策を展開し、預金量10兆円へ向けての足固めといたします。

営業力を強化していくために、「Retail（リテール）～親しまれる～」 「Relation（リレーション）～頼りにされる～」 「Region（リージョン）～地域密着～」の、“トリプルR”を実践してまいります。

「リテール」においては、顧客セグメント別マーケティング、保証協会保証付貸出を中心としたスモールビジネス取引拡大、金融円滑化への対応強化、住宅ローンの推進、給振・年金振込先の増強などにより、取引先数拡大と取引多面化・メイン化を進めてまいります。

「リレーション」においては、顧客のライフサイクルに応じた相談・提案、地銀随一の充実したネットワーク活用による海外ビジネス支援など、活発なソリューション営業を展開してまいります。

「リージョン」においては、農業・医療・環境などの地域の成長業種支援や、企業誘致、産学官連携の取り組み、CSRへの取り組みなどを通じて、地域金融グループとして一層地域に密着した活動を行ってまいります。

平成23年5月より、横浜銀行との共同開発による新システム（MEJAR）の稼働を予定しております。システムの安定稼働に向けて万全な態勢をとるほか、システムの戦略的活用により、事務の共通化、バックオフィスの共同化、開発コストの低減、経費抑制、人員捻出による営業戦増強などを進め、グループのシナジー効果を加速化させてまいります。

以上により、効率的な経営のもとに安定的な収益を確保し積上げることで、自己資本の質の向上を図り、収益状況に応じて、普通株式の段階的増配を目指してまいります。

これらの取り組みを着実に進め、「地域から親しまれ、頼りにされる金融グループ」として、株主、お客さまからの評価を向上させてまいりたいと考えております。

4. 連結財務諸表  
(1) 連結貸借対照表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成21年3月31日)	当連結会計年度 (平成22年3月31日)
<b>資産の部</b>		
現金預け金	412,377	390,229
コールローン及び買入手形	60,726	78,423
買入金銭債権	154,830	131,760
特定取引資産	8,719	9,657
金銭の信託	4,751	4,400
有価証券	※1, ※7, ※14 1,673,591	※1, ※7, ※14 2,013,505
貸出金	※2, ※3, ※4, ※5, ※6, ※7, ※8 7,133,148	※2, ※3, ※4, ※5, ※6, ※7, ※8 6,981,201
外国為替	※6 13,381	※6 11,178
その他資産	※7 182,963	※7 235,069
有形固定資産	※10, ※11 111,642	※10, ※11 112,453
建物	37,468	37,754
土地	※9 64,871	※9 64,744
リース資産	304	835
建設仮勘定	312	527
その他の有形固定資産	8,686	8,591
無形固定資産	39,902	38,246
ソフトウェア	5,898	6,659
のれん	33,016	30,611
リース資産	225	211
その他の無形固定資産	761	764
繰延税金資産	93,391	74,906
支払承諾見返	135,055	114,235
貸倒引当金	△95,397	△88,060
資産の部合計	9,929,086	10,107,208
<b>負債の部</b>		
預金	※7 8,590,573	※7 9,011,487
譲渡性預金	70,965	71,905
コールマネー及び売渡手形	※7 10,000	—
特定取引負債	2,263	2,719
借入金	※7, ※12 395,559	※7, ※12 248,175
外国為替	55	142
社債	※13 64,500	※13 59,500
その他負債	196,678	164,046
退職給付引当金	8,960	8,153
役員退職慰労引当金	—	1,273
偶発損失引当金	1,558	2,152
睡眠預金払戻損失引当金	2,196	2,121
再評価に係る繰延税金負債	※9 9,054	※9 8,969
支払承諾	135,055	114,235
負債の部合計	9,487,421	9,694,883

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成21年3月31日)	当連結会計年度 (平成22年3月31日)
純資産の部		
資本金	70,895	70,895
資本剰余金	223,098	153,189
利益剰余金	156,942	170,100
自己株式	△470	△589
株主資本合計	450,466	393,595
その他有価証券評価差額金	△18,341	9,180
繰延ヘッジ損益	△45	△17
土地再評価差額金	※9 8,908	※9 8,784
評価・換算差額等合計	△9,478	17,947
少数株主持分	676	781
純資産の部合計	441,664	412,324
負債及び純資産の部合計	9,929,086	10,107,208

(2) 連結損益計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
経常収益	239,648	226,758
資金運用収益	164,295	153,592
貸出金利息	140,596	130,954
有価証券利息配当金	19,280	18,991
コールローン利息及び買入手形利息	616	332
買現先利息	76	16
債券貸借取引受入利息	49	3
預け金利息	1,295	1,265
その他の受入利息	2,380	2,027
役務取引等収益	41,017	39,863
特定取引収益	1,633	1,518
その他業務収益	29,345	27,655
その他経常収益	3,357	4,128
経常費用	218,249	191,344
資金調達費用	30,536	23,241
預金利息	25,157	18,441
譲渡性預金利息	588	324
コールマネー利息及び売渡手形利息	90	12
債券貸借取引支払利息	60	—
借入金利息	2,254	2,093
社債利息	1,885	1,785
その他の支払利息	498	583
役務取引等費用	11,547	11,987
その他業務費用	18,837	15,019
営業経費	100,622	106,126
その他経常費用	56,705	34,969
貸倒引当金繰入額	33,909	23,180
その他の経常費用	※1 22,795	※1 11,788
経常利益	21,399	35,413
特別利益	2,517	244
固定資産処分益	1	155
償却債権取立益	113	87
退職給付信託設定益	2,093	—
収用補償金	297	—
その他の特別利益	10	1
特別損失	1,593	2,787
固定資産処分損	1,572	703
減損損失	14	331
退職給付信託設定損	—	445
過年度役員退職慰労引当金繰入額	—	1,119
その他の特別損失	6	186
税金等調整前当期純利益	22,323	32,871
法人税、住民税及び事業税	8,516	9,024
過年度法人税等	—	779
過年度法人税等戻入額	—	△104
法人税等調整額	△23,315	3,866
法人税等合計	△14,798	13,566
少数株主利益	87	92
当期純利益	37,034	19,212

(3) 連結株主資本等変動計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
<b>株主資本</b>		
資本金		
前期末残高	70,895	70,895
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	70,895	70,895
資本剰余金		
前期末残高	253,234	223,098
当期変動額		
自己株式の処分	△25	△6
自己株式の消却	△30,110	△69,903
当期変動額合計	△30,135	△69,909
当期末残高	223,098	153,189
利益剰余金		
前期末残高	125,950	156,942
当期変動額		
剰余金の配当	△6,053	△6,178
当期純利益	37,034	19,212
土地再評価差額金の取崩	10	124
当期変動額合計	30,992	13,158
当期末残高	156,942	170,100
自己株式		
前期末残高	△421	△470
当期変動額		
自己株式の取得	△30,232	△70,039
自己株式の処分	72	17
自己株式の消却	30,110	69,903
当期変動額合計	△48	△119
当期末残高	△470	△589
株主資本合計		
前期末残高	449,658	450,466
当期変動額		
剰余金の配当	△6,053	△6,178
当期純利益	37,034	19,212
自己株式の取得	△30,232	△70,039
自己株式の処分	47	11
土地再評価差額金の取崩	10	124
当期変動額合計	807	△56,870
当期末残高	450,466	393,595

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
<b>評価・換算差額等</b>		
<b>その他有価証券評価差額金</b>		
前期末残高	△4,722	△18,341
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△13,618	27,521
当期変動額合計	△13,618	27,521
当期末残高	△18,341	9,180
<b>繰延ヘッジ損益</b>		
前期末残高	△16	△45
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△28	27
当期変動額合計	△28	27
当期末残高	△45	△17
<b>土地再評価差額金</b>		
前期末残高	8,918	8,908
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△10	△124
当期変動額合計	△10	△124
当期末残高	8,908	8,784
<b>評価・換算差額等合計</b>		
前期末残高	4,179	△9,478
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△13,657	27,425
当期変動額合計	△13,657	27,425
当期末残高	△9,478	17,947
<b>少数株主持分</b>		
前期末残高	590	676
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	86	104
当期変動額合計	86	104
当期末残高	676	781
<b>純資産合計</b>		
前期末残高	454,428	441,664
当期変動額		
剰余金の配当	△6,053	△6,178
当期純利益	37,034	19,212
自己株式の取得	△30,232	△70,039
自己株式の処分	47	11
土地再評価差額金の取崩	10	124
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△13,571	27,530
当期変動額合計	△12,763	△29,340
当期末残高	441,664	412,324

(4) 連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	22,323	32,871
減価償却費	7,135	8,231
減損損失	14	331
のれん償却額	2,420	2,405
持分法による投資損益(△は益)	△3	△1
貸倒引当金の増減(△)	△7,772	△7,336
偶発損失引当金の増減額(△は減少)	959	593
退職給付引当金の増減額(△は減少)	△2,091	△806
睡眠預金払戻損失引当金の増減(△)	△580	△75
資金運用収益	△164,295	△153,592
資金調達費用	30,536	23,241
有価証券関係損益(△)	18,210	△639
金銭の信託の運用損益(△は運用益)	124	△49
為替差損益(△は益)	41	92
固定資産処分損益(△は益)	1,570	548
特定取引資産の純増(△)減	△767	△938
特定取引負債の純増減(△)	699	456
貸出金の純増(△)減	△261,765	151,947
預金の純増減(△)	249,742	420,913
譲渡性預金の純増減(△)	△23,828	940
借入金(劣後特約付借入金を除く)の純増減(△)	149,796	△171,883
預け金(日銀預け金を除く)の純増(△)減	△46,560	35,590
コールローン等の純増(△)減	51,862	5,373
コールマネー等の純増減(△)	△30,000	△10,000
債券貸借取引受入担保金の純増減(△)	△6,492	—
外国為替(資産)の純増(△)減	647	2,202
外国為替(負債)の純増減(△)	△214	87
資金運用による収入	144,010	134,202
資金調達による支出	△22,680	△17,913
その他	37,048	△91,174
小計	150,091	365,618
法人税等の支払額	△794	△11,581
営業活動によるキャッシュ・フロー	149,296	354,037

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
有価証券の取得による支出	△1,013,105	△1,849,490
有価証券の売却による収入	669,250	1,302,641
有価証券の償還による収入	288,450	257,227
金銭の信託の減少による収入	2,600	500
投資活動としての資金運用による収入	19,302	19,041
有形固定資産の取得による支出	△12,128	△7,233
有形固定資産の売却による収入	2,951	54
無形固定資産の取得による支出	△2,267	△2,952
投資活動によるキャッシュ・フロー	△44,945	△280,212
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
劣後特約付借入れによる収入	20,000	30,000
劣後特約付借入金の返済による支出	—	△5,500
劣後特約付社債の償還による支出	△2,000	△20,000
劣後特約付社債の発行による収入	—	15,000
財務活動としての資金調達による支出	△3,081	△3,656
配当金の支払額	△6,053	△6,178
少数株主への配当金の支払額	△0	△0
自己株式の取得による支出	△30,232	△70,039
自己株式の売却による収入	47	11
財務活動によるキャッシュ・フロー	△21,319	△60,363
現金及び現金同等物に係る換算差額	△41	△19
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	82,989	13,442
現金及び現金同等物の期首残高	165,335	248,324
現金及び現金同等物の期末残高	※1 248,324	※1 261,766

(5) 継続企業の前提に関する注記

該当事項はありません。

(6) 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項

	前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
1. 連結の範囲に関する事項	(1) 連結子会社 15社 主要な連結子会社名は、「第1 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。 なお、北銀資産管理株式会社は、平成21年3月31日付で清算を結了しました。(損益のみ連結しております。) また、北銀オフィス・サービス株式会社及び株式会社北銀コーポレートは、平成21年3月31日の株主総会において解散を決議し、清算会社となっております。	(1) 連結子会社 14社 主要な連結子会社名は、「第1 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。 北銀資産管理株式会社は、清算により連結子会社から除外しております。 また、北銀オフィス・サービス株式会社は、平成21年6月24日付で、株式会社北銀コーポレートは、平成21年9月30日付で清算を結了いたしました。さらに、北銀不動産サービス株式会社は、平成22年3月25日付で株式会社北陸銀行が吸収合併いたしました。(3社の損益のみ連結しております。) (会計方針の変更) 当連結会計年度から「連結財務諸表における子会社及び関連会社の範囲の決定に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第22号平成20年5月13日公表分)を適用しております。これによる連結財務諸表等に与える影響はありません。
	(2) 非連結子会社 3社 会社名 道銀どさんこ1号投資事業有限責任組合 道銀どさんこ2号投資事業有限責任組合 道銀サハリンビジネス投資事業有限責任組合 非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及び繰延ヘッジ損益(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。	(2) 非連結子会社 2社 会社名 道銀どさんこ1号投資事業有限責任組合 道銀どさんこ2号投資事業有限責任組合 非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及び繰延ヘッジ損益(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。 なお、道銀サハリンビジネス投資事業有限責任組合は平成21年12月31日付で解散したことにより非連結子会社から除外しております。
2. 持分法の適用に関する事項	(1) 持分法適用の非連結子会社 なし	(1) 持分法適用の非連結子会社 なし
	(2) 持分法適用の関連会社 1社 会社名 ほくほくキャピタル株式会社(北陸キャピタル株式会社が社名変更)	(2) 持分法適用の関連会社 1社 会社名 ほくほくキャピタル株式会社
	(3) 持分法非適用の非連結子会社 3社 会社名 道銀どさんこ1号投資事業有限責任組合 道銀どさんこ2号投資事業有限責任組合 道銀サハリンビジネス投資事業有限責任組合 持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及び繰延ヘッジ損益(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除外しております。	(3) 持分法非適用の非連結子会社 2社 会社名 道銀どさんこ1号投資事業有限責任組合 道銀どさんこ2号投資事業有限責任組合 持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及び繰延ヘッジ損益(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除外しております。 なお、道銀サハリンビジネス投資事業有限責任組合は平成21年12月31日付で解散したことにより持分法非適用の非連結子会社から除外しております。
	(4) 持分法非適用の関連会社 なし	(4) 持分法非適用の関連会社 なし

	前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
3. 連結子会社の事業年度等に関する事項	<p>(1) 連結子会社の決算日は次のとおりであります。</p> <p>3月末日 13社 12月末日 2社</p> <p>(2) 連結子会社の決算日が連結決算日と異なる2社については、連結決算日に実施した仮決算に基づく財務諸表により連結しております。</p>	<p>(1) 連結子会社の決算日は次のとおりであります。</p> <p>3月末日 12社 12月末日 2社</p> <p>(2) 同左</p>
4. 会計処理基準に関する事項	<p>(1) 特定取引資産・負債の評価基準及び収益・費用の計上基準</p> <p>金利、通貨の価格、金融商品市場における相場その他の指標に係る短期的な変動、市場間の格差等を利用して利益を得る等の目的（以下「特定取引目的」という）の取引については、取引の約定時点を基準とし、連結貸借対照表上「特定取引資産」及び「特定取引負債」に計上するとともに、当該取引からの損益を連結損益計算書上「特定取引収益」及び「特定取引費用」に計上しております。</p> <p>特定取引資産及び特定取引負債の評価は、有価証券及び金銭債権等については連結決算日の時価により、スワップ・先物・オプション取引等の派生商品については連結決算日において決済したものとみなした額により行っております。</p> <p>また、特定取引収益及び特定取引費用の損益計上は、当連結会計年度中の受払利息等に、有価証券、金銭債権等については前連結会計年度末と当連結会計年度末における評価損益の増減額を、派生商品については前連結会計年度末と当連結会計年度末におけるみなし決済からの損益相当額の増減額を加えております。</p> <p>(2) 有価証券の評価基準及び評価方法</p> <p>(イ) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、その他有価証券のうち時価のある株式については連結決算期末前1カ月の市場価格の平均に基づく価格、それ以外については連結決算日における市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、時価のないものについては、移動平均法による原価法又は償却原価法により行っております。</p> <p>なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。</p> <p>(ロ) 金銭の信託において信託財産を構成している有価証券の評価は、上記(1)及び(2)(イ)と同じ方法により行っております。</p> <p>(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法</p> <p>デリバティブ取引（特定取引目的の取引を除く）の評価は、時価法により行っております。</p>	<p>(1) 特定取引資産・負債の評価基準及び収益・費用の計上基準</p> <p>同左</p> <p>(2) 有価証券の評価基準及び評価方法</p> <p>(イ) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、その他有価証券のうち時価のある株式については連結決算期末前1カ月の市場価格の平均に基づく価格、それ以外については連結決算日における市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては、移動平均法による原価法により行っております。</p> <p>なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。</p> <p>(ロ) 同左</p> <p>(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法</p> <p>同左</p>

	<p>前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)</p>	<p>当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)</p>
	<p>(4) 減価償却の方法</p> <p>①有形固定資産（リース資産を除く） 当社及び銀行業を営む連結子会社の有形固定資産は、動産については定率法、不動産については主として定額法を採用しております。 なお、主な耐用年数は次のとおりであります。 建物：6年～50年 その他：3年～20年 銀行業を営む連結子会社以外の連結子会社の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定率法により償却しております。</p> <p>②無形固定資産（リース資産を除く） 無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当社及び連結子会社で定める利用可能期間（主として6年）に基づいて償却しております。</p> <p>③リース資産 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法によっております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。</p>	<p>(4) 減価償却の方法</p> <p>①有形固定資産（リース資産を除く） 同左</p> <p>②無形固定資産（リース資産を除く） 無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当社及び連結子会社で定める利用可能期間（主として5年）に基づいて償却しております。</p> <p>③リース資産 同左</p>
	<p>(5) 貸倒引当金の計上基準 銀行業を営む連結子会社の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。 破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。上記以外の債権については、一定の種類ごとに分類し、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。 すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。 当社及び銀行業を営む連結子会社以外の連結子会社においても同様に資産の自己査定を行い、必要な引当を行っております。</p>	<p>(5) 貸倒引当金の計上基準 銀行業を営む連結子会社の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。 破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。上記以外の債権については、一定の種類ごとに分類し、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。 すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。 当社及び銀行業を営む連結子会社以外の連結子会社においても同様に資産の自己査定を行い、必要な引当を行っております。</p>

	<p>前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)</p>	<p>当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)</p>
	<p>なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は125,706百万円です。</p> <p>(6) 退職給付引当金の計上基準 退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。</p> <p>過去勤務債務：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（8年又は9年）による定額法により損益処理 数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（8年又は9年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌連結会計年度から損益処理</p> <p>なお、会計基準変更時差異（28,423百万円）については、15年による按分額を費用処理しております。</p> <p>(追加情報) 子会社である株式会社北海道銀行において、平成21年3月に退職給付信託を設定しております。これにより、退職給付引当金は2,502百万円減少し、特別利益として2,093百万円計上しております。</p>	<p>なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は124,484百万円です。</p> <p>(6) 退職給付引当金の計上基準 退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。</p> <p>過去勤務債務：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（8年又は9年）による定額法により損益処理 数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（8年又は9年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌連結会計年度から損益処理</p> <p>なお、会計基準変更時差異（28,423百万円）については、15年による按分額を費用処理しております。</p> <p>(会計方針の変更) 当連結会計年度末から「『退職給付に係る会計基準』の一部改正（その3）」（企業会計基準第19号平成20年7月31日）を適用しております。</p> <p>なお、従来の方法による割引率と同一の割引率を使用することとなったため、当連結会計年度の連結財務諸表に与える影響はありません。</p> <p>(追加情報) 子会社である株式会社北海道銀行において、平成21年9月に退職給付信託に追加拠出しております。これにより、退職給付引当金は3,041百万円減少し、特別損失として445百万円計上しております。</p>
	<p>—————</p>	<p>(7) 役員退職慰労引当金の計上基準 役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払に備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見込額のうち、当連結会計年度末までに発生していると認められる額を計上しております。</p> <p>(追加情報) 当社設立時から、当社の財務状況や公的資金の導入を鑑み、社外役員以外の役員に対する退職慰労金の支給を見送ってまいりましたが、財務状況が着実に改善し平成21年8月に公的資金の返済を終えましたことから、社外役員以外の取締役及び監査役に対する役員退職慰労引当金を当連結会計年度末から計上しております。</p>

	前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
	(8) 偶発損失引当金の計上基準 偶発損失引当金は、信用保証協会における責任共有制度等に基づく、将来発生する可能性のある負担金支払見込額を計上しております。	(8) 偶発損失引当金の計上基準 同左
	(9) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準 睡眠預金払戻損失引当金は、利益計上した睡眠預金について預金者からの払戻請求に基づく払戻損失に備えるため、過去の払戻実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。	(9) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準 同左
	(10) 外貨建資産・負債の換算基準 外貨建資産・負債については、主として連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。	(10) 外貨建資産・負債の換算基準 同左
	(11) リース取引の処理方法 所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年4月1日前に開始する連結会計年度に属するものについては、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。	(11) リース取引の処理方法 同左
	(12) 重要なヘッジ会計の方法 (イ) 金利リスク・ヘッジ 銀行業を営む連結子会社の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法として、一部の資産・負債について、ヘッジ対象とヘッジ手段を直接対応させる「個別ヘッジ」を適用し、繰延ヘッジによる会計処理あるいは金利スワップの特例処理を行っております。 ヘッジの有効性評価の方法については、リスク管理手続きに則り、ヘッジ指定を行い、ヘッジ手段とヘッジ対象を一体管理するとともに、ヘッジ手段によってヘッジ対象の金利リスクが減殺されているかどうかを検証することで評価しております。 (ロ) 為替変動リスク・ヘッジ 銀行業を営む連結子会社の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に規定する繰延ヘッジによっております。 ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。 (ハ) 銀行業を営む連結子会社以外の連結子会社においては、デリバティブ取引によるヘッジを行っておりません。	(12) 重要なヘッジ会計の方法 (イ) 金利リスク・ヘッジ 同左  (ロ) 為替変動リスク・ヘッジ 同左  (ハ) 当社及び銀行業を営む連結子会社以外の連結子会社においては、デリバティブ取引によるヘッジを行っておりません。

	前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
	(13) 消費税等の会計処理 消費税及び地方消費税（以下「消費税等」という）の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当連結会計年度の費用に計上しております。	(13) 消費税等の会計処理 同左
	(14) ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準 リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。	(14) ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準 同左
5. 連結子会社の資産及び負債の評価に関する事項	連結子会社の資産及び負債については、全面時価評価法を採用しております。	同左
6. のれん及び負ののれんの償却に関する事項	のれんの償却については、5年間又は20年間で均等償却を行っております。	同左
7. 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲	連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。	同左

(7) 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項の変更

前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
<p>(リース取引に関する会計基準)</p> <p>所有権移転外ファイナンス・リース取引については、従来、賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっておりましたが、「リース取引に関する会計基準」（企業会計基準第13号平成19年3月30日）及び「リース取引に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第16号同前）が平成20年4月1日以後開始する連結会計年度から適用されることになったことに伴い、当連結会計年度から同会計基準及び適用指針を適用しております。</p> <p>これによる、連結貸借対照表及び連結損益計算書に与える影響は軽微であります。</p> <p>セグメント情報に与える影響については、当該箇所に記載しております。</p>	<p>(金融商品に関する会計基準)</p> <p>当連結会計年度末から「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第10号平成20年3月10日）及び「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第19号平成20年3月10日）を適用しております。</p> <p>これにより、従来の方法に比べ、有価証券は988百万円増加、繰延税金資産は399百万円減少、その他有価証券評価差額金は589百万円増加し、経常利益及び税金等調整前当期純利益は、それぞれ490百万円増加しております。</p>

(8) 表示方法の変更

前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
	<p>(連結貸借対照表)</p> <p>前連結会計年度末まで、「その他負債」に含めて表示しておりました「役員退職慰労引当金」は、当連結会計年度末において重要性が増したため区分掲記しております。なお、前連結会計年度末の「役員退職慰労引当金」は64百万円であります。</p>

(9)追加情報

<p>前連結会計年度 (自 平成20年 4月 1日 至 平成21年 3月31日)</p>	<p>当連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)</p>
<p>(その他有価証券に係る時価の算定方法の一部変更)</p> <p>変動利付国債の時価については、従来、市場価格をもって連結貸借対照表計上額としておりましたが、昨今の市場環境を踏まえた検討の結果、市場価格を時価とみなせない銘柄を当社の基準により判断し、当連結会計年度から合理的に算定された価額をもって連結貸借対照表計上額としております。これにより、市場価格をもって連結貸借対照表価額とした場合に比べ、「有価証券」は12,686百万円増加、「繰延税金資産」は5,124百万円減少、「その他有価証券評価差額金」は7,562百万円増加しております。</p> <p>なお、変動利付国債の合理的に算定された価額は、国債の利回り等から見積もった将来キャッシュ・フローを、同利回りに基づく割引率を用いて割り引くことにより算定しており、国債の利回り及び同利回りのボラティリティが主な価格決定変数であります。</p>	<p>—————</p>

(10) 注記事項  
(連結貸借対照表関係)

前連結会計年度 (平成21年3月31日)	当連結会計年度 (平成22年3月31日)
<p>※1. 有価証券には、非連結子会社及び関連会社の株式82百万円及び出資金1,361百万円を含んでおります。</p> <p>※2. 貸出金のうち、破綻先債権額は31,134百万円、延滞債権額は182,427百万円であります。</p> <p>なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という）のうち、法人税法施行令（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。</p> <p>また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。</p> <p>※3. 貸出金のうち、3カ月以上延滞債権額は707百万円であります。</p> <p>なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※4. 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は16,412百万円あります。</p> <p>なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※5. 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は230,682百万円あります。</p> <p>なお、上記2. から5. に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。</p> <p>※6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形及び買入外国為替は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は、98,059百万円あります。</p>	<p>※1. 有価証券には、非連結子会社及び関連会社の株式180百万円及び出資金1,145百万円を含んでおります。</p> <p>※2. 貸出金のうち、破綻先債権額は17,732百万円、延滞債権額は184,050百万円あります。</p> <p>なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という）のうち、法人税法施行令（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。</p> <p>また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。</p> <p>※3. 貸出金のうち、3カ月以上延滞債権額は746百万円あります。</p> <p>なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※4. 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は16,083百万円あります。</p> <p>なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※5. 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は218,612百万円あります。</p> <p>なお、上記2. から5. に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。</p> <p>※6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形及び買入外国為替は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は、69,624百万円あります。</p>

前連結会計年度 (平成21年3月31日)	当連結会計年度 (平成22年3月31日)																														
<p>※7. 担保に供している資産は次のとおりであります。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="2">担保に供している資産</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">有価証券</td> <td style="text-align: right;">279,322百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">貸出金</td> <td style="text-align: right;">346,216百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他資産</td> <td style="text-align: right;">500百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">担保資産に対応する債務</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">預金</td> <td style="text-align: right;">52,962百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">コールマネー</td> <td style="text-align: right;">10,000百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">借入金</td> <td style="text-align: right;">323,754百万円</td> </tr> </table> <p>上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、有価証券247,370百万円、その他資産210百万円を差し入れております。</p> <p>また、その他資産のうち先物取引差入証拠金は10百万円、保証金は4,368百万円であります。</p> <p>※8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、2,218,922百万円であります。このうち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なものが2,177,913百万円あります。</p> <p>なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当社及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内（社内）手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。</p> <p>※9. 土地の再評価に関する法律（平成10年3月31日公布法律第34号）に基づき、株式会社北陸銀行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。</p> <p>再評価を行った年月日 平成10年3月31日</p> <p>同法律第3条第3項に定める再評価の方法 土地の再評価に関する法律施行令（平成10年3月31日公布政令第119号）第2条第4号に定める算定方法に基づき、地価税法に規定する地価税の課税価格の計算基礎となる土地の価額（路線価）を基準として時価を算出しております。</p> <p>同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の当連結会計年度末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額</p> <p style="text-align: right;">22,758百万円</p>	担保に供している資産		有価証券	279,322百万円	貸出金	346,216百万円	その他資産	500百万円	担保資産に対応する債務		預金	52,962百万円	コールマネー	10,000百万円	借入金	323,754百万円	<p>※7. 担保に供している資産は次のとおりであります。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="2">担保に供している資産</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">有価証券</td> <td style="text-align: right;">313,342百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">貸出金</td> <td style="text-align: right;">307,429百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他資産</td> <td style="text-align: right;">130百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">担保資産に対応する債務</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">預金</td> <td style="text-align: right;">51,212百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">借入金</td> <td style="text-align: right;">151,718百万円</td> </tr> </table> <p>上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、有価証券242,041百万円、その他資産210百万円を差し入れております。</p> <p>また、その他資産のうち先物取引差入証拠金は10百万円、保証金は4,446百万円であります。</p> <p>※8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、2,240,812百万円あります。このうち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なものが2,193,751百万円あります。</p> <p>なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当社及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内（社内）手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。</p> <p>※9. 土地の再評価に関する法律（平成10年3月31日公布法律第34号）に基づき、株式会社北陸銀行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。</p> <p>再評価を行った年月日 平成10年3月31日</p> <p>同法律第3条第3項に定める再評価の方法 土地の再評価に関する法律施行令（平成10年3月31日公布政令第119号）第2条第4号に定める算定方法に基づき、地価税法に規定する地価税の課税価格の計算基礎となる土地の価額（路線価）を基準として時価を算出しております。</p> <p>同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の当連結会計年度末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額</p> <p style="text-align: right;">23,432百万円</p>	担保に供している資産		有価証券	313,342百万円	貸出金	307,429百万円	その他資産	130百万円	担保資産に対応する債務		預金	51,212百万円	借入金	151,718百万円
担保に供している資産																															
有価証券	279,322百万円																														
貸出金	346,216百万円																														
その他資産	500百万円																														
担保資産に対応する債務																															
預金	52,962百万円																														
コールマネー	10,000百万円																														
借入金	323,754百万円																														
担保に供している資産																															
有価証券	313,342百万円																														
貸出金	307,429百万円																														
その他資産	130百万円																														
担保資産に対応する債務																															
預金	51,212百万円																														
借入金	151,718百万円																														

前連結会計年度 (平成21年3月31日)	当連結会計年度 (平成22年3月31日)
※10. 有形固定資産の減価償却累計額 96,000百万円	※10. 有形固定資産の減価償却累計額 96,929百万円
※11. 有形固定資産の圧縮記帳額 3,898百万円 (当連結会計年度圧縮記帳額 一百万円)	※11. 有形固定資産の圧縮記帳額 3,898百万円 (当連結会計年度圧縮記帳額 一百万円)
※12. 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金70,500百万円が含まれております。	※12. 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金95,000百万円が含まれております。
※13. 社債のうち、劣後保証付永久劣後債は24,500百万円、劣後特約付期限付劣後債は40,000百万円であります。	※13. 社債のうち、劣後保証付永久劣後債は24,500百万円、劣後特約付期限付劣後債は35,000百万円であります。
※14. 有価証券中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額は114,419百万円であります。	※14. 有価証券中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額は101,465百万円であります。

(連結損益計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
※1. その他の経常費用には、貸出金償却1,193百万円、株式等償却15,779百万円、債権売却損1,955百万円を含んでおります。	※1. その他の経常費用には、貸出金償却3,941百万円、株式等償却2,151百万円、債権売却損1,223百万円を含んでおります。

(連結株主資本等変動計算書関係)

I 前連結会計年度(自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	前連結会計年度末 株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)	摘要
発行済株式					
普通株式	1,391,630	—	—	1,391,630	
第1回第1種優先株式	80,000	—	30,000	50,000	注1
第1回第4種優先株式	79,000	—	17,600	61,400	注1
第1回第5種優先株式	107,432	—	—	107,432	
合計	1,658,062	—	47,600	1,610,462	
自己株式					
普通株式	1,199	498	208	1,488	注2
第1回第1種優先株式	—	30,000	30,000	—	注3
第1回第4種優先株式	—	17,600	17,600	—	注3
合計	1,199	48,098	47,808	1,488	

- (注) 1. 第1回第1種優先株式の株式数の減少30,000千株及び第1回第4種優先株式の株式数の減少17,600千株は、それぞれの優先株式の一部消却であります。
2. 普通株式の自己株式の株式数の増加498千株は、単元未満株式の買取りによる増加、減少208千株は、単元未満株主からの売渡請求による減少であります。
3. 第1回第1種優先株式の自己株式の株式数の増加及び減少30,000千株並びに第1回第4種優先株式の自己株式の株式数の増加及び減少17,600千株は、それぞれの優先株式の一部取得及び消却であります。

## 2. 配当に関する事項

## (1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たりの 金額 (円)	基準日	効力発生日
平成20年6月25日 定時株主総会	普通株式	3,476	2.50	平成20年3月31日	平成20年6月26日
	第1回第1種 優先株式	308	3.85	平成20年3月31日	平成20年6月26日
	第1回第4種 優先株式	261	3.31	平成20年3月31日	平成20年6月26日
	第1回第5種 優先株式	805	7.50	平成20年3月31日	平成20年6月26日
平成20年11月14日 取締役会	第1回第1種 優先株式	192	3.85	平成20年9月30日	平成20年12月10日
	第1回第4種 優先株式	203	3.31	平成20年9月30日	平成20年12月10日
	第1回第5種 優先株式	805	7.50	平成20年9月30日	平成20年12月10日

## (2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たりの 金額 (円)	基準日	効力発生日
平成21年6月25日 定時株主総会	普通株式	4,170	利益剰余金	3.00	平成21年3月31日	平成21年6月26日
	第1回第1種 優先株式	192	利益剰余金	3.85	平成21年3月31日	平成21年6月26日
	第1回第4種 優先株式	203	利益剰余金	3.31	平成21年3月31日	平成21年6月26日
	第1回第5種 優先株式	805	利益剰余金	7.50	平成21年3月31日	平成21年6月26日

## II 当連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

## 1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	前連結会計年度末 株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)	摘要
発行済株式					
普通株式	1,391,630	—	—	1,391,630	
第1回第1種優先株式	50,000	—	50,000	—	注1
第1回第4種優先株式	61,400	—	61,400	—	注1
第1回第5種優先株式	107,432	—	—	107,432	
合計	1,610,462	—	111,400	1,499,062	
自己株式					
普通株式	1,488	694	57	2,125	注2
第1回第1種優先株式	—	50,000	50,000	—	注3
第1回第4種優先株式	—	61,400	61,400	—	注3
合計	1,488	112,094	111,457	2,125	

- (注) 1. 第1回第1種優先株式の株式数の減少50,000千株及び第1回第4種優先株式の株式数の減少61,400千株は、それぞれの優先株式の消却であります。
2. 普通株式の自己株式の株式数の増加694千株は、単元未満株式の買取りによる増加、減少57千株は、単元未満株主からの売渡請求による減少であります。
3. 第1回第1種優先株式の自己株式の株式数の増加及び減少50,000千株並びに第1回第4種優先株式の自己株式の株式数の増加及び減少61,400千株は、それぞれの優先株式の取得及び消却であります。

2. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成21年6月25日 定時株主総会	普通株式	4,170	3.00	平成21年3月31日	平成21年6月26日
	第1回第1種 優先株式	192	3.85	平成21年3月31日	平成21年6月26日
	第1回第4種 優先株式	203	3.31	平成21年3月31日	平成21年6月26日
	第1回第5種 優先株式	805	7.50	平成21年3月31日	平成21年6月26日
平成21年11月13日 取締役会	第1回第5種 優先株式	805	7.50	平成21年9月30日	平成21年12月10日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの  
平成22年6月25日開催の定時株主総会の議案として、配当に関する事項を次のとおり提案しております。

株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
普通株式	4,863	利益剰余金	3.50	平成22年3月31日	平成22年6月28日
第1回第5種 優先株式	805	利益剰余金	7.50	平成22年3月31日	平成22年6月28日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
※1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表 に掲記されている科目の金額との関係 平成21年3月31日現在 現金預け金勘定 412,377百万円 預け金(日本銀行預け金を除く) △164,053百万円 現金及び現金同等物 248,324百万円	※1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表 に掲記されている科目の金額との関係 平成22年3月31日現在 現金預け金勘定 390,229百万円 預け金(日本銀行預け金を除く) △128,462百万円 現金及び現金同等物 261,766百万円

(リース取引関係)

前連結会計年度 (自 平成20年 4月 1日 至 平成21年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)																																																																		
<p>1. 所有権移転外ファイナンス・リース取引 (借手側)</p> <p>(1) リース資産の内容</p> <p>①有形固定資産 主として、ATM及び電子計算機であります。</p> <p>②無形固定資産 ソフトウェアであります。</p> <p>(2) リース資産の減価償却の方法 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計処理基準に関する事項」の「(4) 減価償却の方法」に記載のとおりであります。</p> <p>(貸手側) リース契約締結日が平成20年4月1日前の所有権移転外ファイナンス・リース取引については、会計基準適用初年度の前連結会計年度末における賃貸資産の帳簿価額(減価償却累計額控除後)をリース投資資産の期首の価額として計上しております。 また、当該リース投資資産に関しては、会計基準適用後の残存期間における利息相当額の各期への配分方法は、定額法によっております。 このため、リース取引開始日に遡及してリース会計基準を適用した場合に比べ、税金等調整前当期純利益が1,232百万円少なく計上されております。</p>	<p>1. 所有権移転外ファイナンス・リース取引 (借手側)</p> <p>(1) リース資産の内容</p> <p>①有形固定資産 同左</p> <p>②無形固定資産 同左</p> <p>(2) リース資産の減価償却の方法 同左</p>																																																																		
<p>2. 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引 (借手側)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額、減損損失累計額相当額及び年度末残高相当額 取得価額相当額</li> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">有形固定資産</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">4,188百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">4,188百万円</td> <td></td> </tr> </table> <p>減価償却累計額相当額</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">有形固定資産</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">2,435百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">2,435百万円</td> <td></td> </tr> </table> <p>年度末残高相当額</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">有形固定資産</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">1,753百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">1,753百万円</td> <td></td> </tr> </table> <p>(注) 取得価額相当額は、未経過リース料年度末残高が有形固定資産の年度末残高等に占める割合が低いいため、支払利子込み法によっております。</p> <li>未経過リース料年度末残高相当額</li> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">1年内</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">652百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>1年超</td> <td style="text-align: right;">1,101百万円</td> <td></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">1,753百万円</td> <td></td> </tr> </table> <p>(注) 未経過リース料年度末残高相当額は、未経過リース料年度末残高が有形固定資産の年度末残高等に占める割合が低いいため、支払利子込み法によっております。</p> <li>支払リース料、リース資産減損勘定の取崩額、減価償却費相当額及び減損損失</li> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">支払リース料</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">690百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>減価償却費相当額</td> <td style="text-align: right;">690百万円</td> <td></td> </tr> </table> </ul>	有形固定資産	4,188百万円		合計	4,188百万円		有形固定資産	2,435百万円		合計	2,435百万円		有形固定資産	1,753百万円		合計	1,753百万円		1年内	652百万円		1年超	1,101百万円		合計	1,753百万円		支払リース料	690百万円		減価償却費相当額	690百万円		<p>2. 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引 (借手側)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額、減損損失累計額相当額及び年度末残高相当額 取得価額相当額</li> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">有形固定資産</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">3,226百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">3,226百万円</td> <td></td> </tr> </table> <p>減価償却累計額相当額</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">有形固定資産</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">2,181百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">2,181百万円</td> <td></td> </tr> </table> <p>年度末残高相当額</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">有形固定資産</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">1,045百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">1,045百万円</td> <td></td> </tr> </table> <p>(注) 取得価額相当額は、未経過リース料年度末残高が有形固定資産の年度末残高等に占める割合が低いいため、支払利子込み法によっております。</p> <li>未経過リース料年度末残高相当額</li> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">1年内</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">516百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>1年超</td> <td style="text-align: right;">529百万円</td> <td></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">1,045百万円</td> <td></td> </tr> </table> <p>(注) 未経過リース料年度末残高相当額は、未経過リース料年度末残高が有形固定資産の年度末残高等に占める割合が低いいため、支払利子込み法によっております。</p> <li>支払リース料、リース資産減損勘定の取崩額、減価償却費相当額及び減損損失</li> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">支払リース料</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">652百万円</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>減価償却費相当額</td> <td style="text-align: right;">652百万円</td> <td></td> </tr> </table> </ul>	有形固定資産	3,226百万円		合計	3,226百万円		有形固定資産	2,181百万円		合計	2,181百万円		有形固定資産	1,045百万円		合計	1,045百万円		1年内	516百万円		1年超	529百万円		合計	1,045百万円		支払リース料	652百万円		減価償却費相当額	652百万円	
有形固定資産	4,188百万円																																																																		
合計	4,188百万円																																																																		
有形固定資産	2,435百万円																																																																		
合計	2,435百万円																																																																		
有形固定資産	1,753百万円																																																																		
合計	1,753百万円																																																																		
1年内	652百万円																																																																		
1年超	1,101百万円																																																																		
合計	1,753百万円																																																																		
支払リース料	690百万円																																																																		
減価償却費相当額	690百万円																																																																		
有形固定資産	3,226百万円																																																																		
合計	3,226百万円																																																																		
有形固定資産	2,181百万円																																																																		
合計	2,181百万円																																																																		
有形固定資産	1,045百万円																																																																		
合計	1,045百万円																																																																		
1年内	516百万円																																																																		
1年超	529百万円																																																																		
合計	1,045百万円																																																																		
支払リース料	652百万円																																																																		
減価償却費相当額	652百万円																																																																		

前連結会計年度 (自 平成20年 4月 1日 至 平成21年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)						
<p>・減価償却費相当額の算定方法 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。 (減損損失について) リース資産に配分された減損損失はありません。</p>	<p>・減価償却費相当額の算定方法 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。 (減損損失について) リース資産に配分された減損損失はありません。</p>						
—————	<p>3. オペレーティング・リース取引</p> <p>・オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">1年内</td> <td style="text-align: right;">212百万円</td> </tr> <tr> <td>1年超</td> <td style="text-align: right;">323百万円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td style="text-align: right;">535百万円</td> </tr> </table>	1年内	212百万円	1年超	323百万円	合計	535百万円
1年内	212百万円						
1年超	323百万円						
合計	535百万円						

(金融商品関係)

当連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、預金、貸出業務等の銀行業務を中心に様々な金融サービスを提供しております。

貸出につきましては、地域経済との共栄を目指し、健全かつ適切な貸出運用を図るとともに信用リスク管理の強化に努めております。有価証券につきましては、リスク管理方針・規定等に基づいた厳格な運用を行っております。預金につきましては、地域のみなさまへの金融サービスの拡充に努めることで、安定的な調達を目指しております。借入金及び社債は、中長期的な資金調達としております。

当社グループが保有する貸出金等の金融資産と預金等の金融負債は期間構造が異なるため、市場の金利変動等に伴うリスクに晒されていることから、資産及び負債の総合的管理(以下「ALM」という)を行い、市場リスクを適切にコントロールして安定的な収益を確保できる運営に努めております。

(2) 金融商品の内容及びリスク

当社グループが保有する金融資産は、主として国内のお取引先に対する貸出金、有価証券であります。貸出金につきましては、お取引先の財務状況の悪化等により資産の価値が減少・消失し損失を被る信用リスクに晒されており、有価証券につきましても、発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスクに晒されておりますが、いずれも適切なリスク分散を図るよう努めております。

金融負債である預金や借入金は、市場環境の急変や当社グループの財務内容の悪化等により、通常より著しく高い金利による資金調達を余儀なくされるなどの流動性リスクに晒されております。

株式会社北陸銀行及び株式会社北海道銀行は通貨スワップ・為替予約・通貨オプション取引等の通貨関連デリバティブ取引や、金利スワップ・金利先物・金利キャップ取引等の金利関連デリバティブ取引を、各行自身のALM目的と、お取引先の多様なニーズに応える目的で利用しております。これらのデリバティブ取引は、金利変動リスク、為替変動リスク、価格変動リスク及び信用リスク等に晒されております。

ただし、当社グループが保有する金融資産・金融負債で著しくリスクが高いものや、時価の変動率が高い特殊なデリバティブ取引の取り扱いはありません。

なお、株式会社北陸銀行では一部の資産・負債をヘッジ対象として金利の変動リスクに対してヘッジ会計を適用しておりますが、ヘッジ会計の適用に際しては、ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象とヘッジ手段を一体管理するとともに、ヘッジの有効性を評価しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

株式会社北陸銀行及び株式会社北海道銀行では、リスク管理部署を設置してリスク管理基本規程及びリスクに関する各種管理規定を定め、ALM委員会や統合リスク管理委員会等を設置して、各種リスクの管理を行っております。

① 信用リスクの管理

信用リスクの適切な管理・運営を行うことにより経営の健全性の確保と収益力の向上に努める基本方針のもと、「信用リスク管理規定」等各種規定類を制定し、業務推進部門と信用リスク管理部門の分離による内部牽制機能の確保、「クレジットポリシー」に基づく厳正な審査と信用格付の付与、与信集中リスク管理のための与信限度ラインの設定等による個別管理、自己査定や信用リスク量の計測ならびに取締役会へのリスク状況の報告等を実施しております。

具体的には、個別案件毎に営業店が的確に分析・審査を行い、営業店長の権限を越える場合は本部の審査部門でも分析・審査を行っております。審査部門には業種・地域毎に専門の担当者を配置し、お取引先の特性に応じて営業店への適切な助言・指導が行える体制を整備しております。

また、有価証券の発行体の信用リスク及びデリバティブ取引のカウンターパーティーリスクに関しては、リスク管理部署において、信用情報や取引状況を定期的に把握・管理しております。

② 市場リスクの管理

「市場リスク管理規定等」を定め、ALM委員会等を設置し、預貸金を含めた市場リスクを適切にコントロールして、安定的な収益を確保できる運営に努めております。

i 金利リスクの管理

「金利リスク管理規定等」の諸規定にリスク管理方法や手続等の詳細を明記し、リスク管理部署が定期的に金融資産及び負債の金利や期間を総合的に把握し、ギャップ分析や金利感応度分析等により金利リスク量をモニタリングするとともに、その結果をALM委員会等に報告・協議し、必要な対策を講じる体制としております。また、金利リスクを適切にコントロールするために、金利リスク量に対する各種限度額を設定・管理し、ALMの観点から金利の変動リスクをヘッジするための金利スワップ及び金利キャップ等のデリバティブ取引を利用して金利リスクの軽減を図っております。

ii 為替リスクの管理

外貨建資産・負債にかかる為替の変動リスクを管理し、通貨スワップ等を利用し、為替リスクの軽減を図っております。

iii 価格変動リスクの管理

有価証券を含む投資商品の保有にあたり、経営会議等で定めた方針に基づき、取締役会の監督の下、事前審査、投資限度額の設定のほか、継続的なモニタリングを通じて、価格変動リスクの軽減を図っております。なお、両行が保有している株式の多くは、政策保有目的で保有しているものであり、取引先の市場環境や財務状況などをモニタリングしております。また、有価証券については、バリュー・アット・リスク (VaR) 等を用いて市場リスク量を把握し、規定で定めた各種ルールの遵守状況等が管理されており、取締役会及び経営会議等へ定期的に報告されております。

iv デリバティブ取引

デリバティブ取引に関しては、取引の執行、ヘッジ有効性の評価、事務管理に関する部門をそれぞれ分離し内部牽制を確立するとともに、管理セクションが取引の確認、日々のポジションの時価評価・損益状況・リスク量の計測を行い、一定の限度を超える損失が発生しないように管理しております。

③ 流動性リスクの管理

流動性リスク管理規定に基づいて、運用・調達の状況を的確に把握し、円滑な資金繰りに万全を期しております。具体的には、国債など資金化の容易な支払準備資産を十分に確保するとともに、流動性リスク管理指標を各種設定し、日々チェックしております。

また、万一危機が発生した場合は、危機の段階に応じた対応が取れるように、流動性リスクの状況をALM委員会等で定期的に報告・管理する体制を整備しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件を採用しているため、異なる前提条件等による場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

平成22年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません（注2）参照。また、重要性の乏しいものは省略しております。

	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金預け金	390,229	390,229	—
(2) 買入金銭債権 (※1)	104,992	104,992	—
(3) 有価証券			
満期保有目的の債券	73,827	74,619	791
その他有価証券	1,908,451	1,908,451	—
(4) 貸出金	6,981,201		
貸倒引当金 (※1)	△82,289		
	6,898,912	6,976,319	77,407
資産計	9,376,413	9,454,613	78,199
(1) 預金	9,011,487	9,025,859	14,372
(2) 借入金	248,175	248,294	119
負債計	9,259,663	9,274,154	14,491
デリバティブ取引 (※2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	5,786	5,786	—
ヘッジ会計が適用されているもの	3,132	3,132	(※3) —
デリバティブ取引計	8,918	8,918	—

(※1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、買入金銭債権に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

(※2) 特定取引資産・負債及びその他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、( ) で表示しております。

(※3) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている貸出金と一体として処理されているため、その時価は当該貸出金に含めて記載しております。

## (注1) 金融商品の時価の算定方法

資 産

## (1) 現金預け金

満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金については、預入期間が1年以内であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

## (2) 買入金銭債権

買入金銭債権のうち、当行が投資家として購入した住宅ローン債権の信託受益権、及び貸付債権の信託受益権については、取引金融機関から提示された価格を時価としております。また、資産流動化の小口債権は、期間毎の市場金利で割り引いた現在価値を算定しております。

## (3) 有価証券

株式は期末前1カ月の市場価格の平均に基づいて算定された価格、債券は取引所の価格又は公表されている価格、これらがなく場合には合理的な見積もりに基づいて算定された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

自行保証付私募債は、残存期間に基づく区分ごとに、信用リスクを加味した市場金利で割り引いた現在価値を算定しております。

変動利付国債の時価については、市場価格を時価とみなせない銘柄を当社の基準により判断し、引き続き合理的に算定された価額をもって連結貸借対照表計上額としております。これにより、市場価格をもって連結貸借対照表計上額とした場合に比べ、「有価証券」は11,470百万円増加、「繰延税金資産」は4,633百万円減少、「その他有価証券評価差額金」は6,836百万円増加しております。

変動利付国債の合理的に算定された価額は、国債の利回り等から見積もった将来キャッシュ・フローを、同利回りに基づく割引率を用いて割り引くことにより算定しており、国債の利回り及び同利回りのボラティリティが主な価格決定変数であります。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については「(有価証券関係)」に記載しております。

## (4) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を信用リスク等を加味した市場金利で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が1年以内のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額に近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

負 債

## (1) 預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が1年以内のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

## (2) 借入金

借入金のうち変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当社及び連結子会社等の信用状態は実行後大きく異なっていないことから、時価は帳簿価額と近似していると考えられるため、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、一定の期間ごとに区分した当該借入金の元利金の合計額を同様の借入において想定される利率で割り引いて現在価値を算定しております。なお、約定期間が1年以内のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引は、金利関連取引(金利先物、金利オプション、金利スワップ等)、通貨関連取引(通貨先物、通貨オプション、通貨スワップ等)、債券関連取引(債券先物、債券先物オプション等)、商品関連取引であり、取引所の価格、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算出した価額によっております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(2)買入金銭債権」及び「資産(3)その他有価証券」には含まれておりません。

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)
① 買入金銭債権 (住宅ローン証券化における劣後受益権) (※1)	26,757
② 非上場株式 (※1) (※2)	31,044
③ 非上場外国証券 (※1)	0
合計	57,802

(※1) 市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしていません。

(※2) 当連結会計年度において、非上場株式について336百万円減損処理を行っております。

(※3) 金融商品に関する会計基準改正の主旨を踏まえ、従来時価のない有価証券としていた信託受益権については、当連結会計年度末より時価評価のうえ金融商品の時価情報に含めており、その連結貸借対照表計上額は104,883百万円であります。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

	1年以内 (百万円)	1年超 3年以内 (百万円)	3年超 5年以内 (百万円)	5年超 7年以内 (百万円)	7年超 (百万円)
預け金	274,482	—	—	—	—
買入金銭債権	2,182	1,434	1,450	—	100,201
有価証券	135,112	369,925	399,212	273,371	658,003
満期保有目的の債券	8,765	16,129	18,780	20,610	9,775
うち国債	—	1,529	8,000	—	7,000
社債	8,765	14,600	10,780	15,945	775
その他	—	—	—	4,665	2,000
その他有価証券のうち満期があるもの	126,347	353,796	380,432	252,761	648,228
うち国債	26,600	122,600	127,100	200,100	439,200
地方債	27,774	72,347	147,512	30,681	128,967
社債	66,395	143,560	93,113	8,679	61,121
その他	5,576	15,289	12,706	13,300	18,938
貸出金 (※)	2,334,580	1,230,505	993,218	557,966	1,621,643
合計	2,746,357	1,601,865	1,393,881	831,337	2,379,849

(※) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない201,782百万円、期間の定めのないもの41,502百万円は含めておりません。

(注4) 社債、借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

	1年以内 (百万円)	1年超 3年以内 (百万円)	3年超 5年以内 (百万円)	5年超 7年以内 (百万円)	7年超 (百万円)
預金 (※)	7,413,741	1,221,836	372,602	1,305	2,000
借入金	133,454	579	2,332	49,010	62,500
合計	7,547,195	1,222,415	374,935	50,315	64,500

(※) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(有価証券関係)

- ※ 1. 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「特定取引資産」中の商品有価証券、「現金預け金」中の譲渡性預け金、並びに「買入金銭債権」中のコマーシャルペーパー及び信託受益権等も含めて記載しております。
- ※ 2. 「子会社株式及び関連会社株式」については該当ありません。

I 前連結会計年度

1. 売買目的有価証券 (平成21年3月31日現在)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	当連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
売買目的有価証券	3,783	28

2. 満期保有目的の債券で時価のあるもの (平成21年3月31日現在)

	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)	うち益 (百万円)	うち損 (百万円)
国債	16,396	16,839	442	443	0
地方債	4,464	4,471	6	6	—
社債	30,183	28,967	△1,216	18	1,235
その他	11,601	11,288	△312	—	312
合計	62,646	61,566	△1,079	468	1,548

- (注) 1. 時価は、当連結会計年度末日における市場価格等に基づいております。  
 2. 「うち益」「うち損」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

3. その他有価証券で時価のあるもの (平成21年3月31日現在)

	取得原価 (百万円)	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	評価差額 (百万円)	うち益 (百万円)	うち損 (百万円)
株式	114,477	104,451	△10,026	8,832	18,858
債券	1,264,669	1,260,759	△3,910	4,398	8,309
国債	702,737	699,552	△3,184	2,428	5,613
地方債	256,002	256,379	376	1,131	754
社債	305,929	304,826	△1,102	838	1,941
その他	113,964	99,967	△13,997	74	14,072
合計	1,493,112	1,465,177	△27,934	13,305	41,240

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、株式については当連結会計年度末前1カ月の市場価格の平均に基づいて算定された額により、また、それ以外については、当連結会計年度末日における市場価格等に基づく時価により、それぞれ計上したものであります。  
 2. 「うち益」「うち損」はそれぞれ「評価差額」の内訳であります。  
 3. その他有価証券で時価のあるもののうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落している等の場合で、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表価額とするとともに、評価差額を当連結会計年度の損失として処理（以下「減損処理」という）しております。  
 当連結会計年度における減損処理額は、15,768百万円（株式13,040百万円、その他2,727百万円）であります。  
 また、「減損処理」は、資産の自己査定における有価証券の発行会社の区分ごとに次のとおり実施しております。

破綻先、実質破綻先、破綻懸念先、要注意先	時価が取得原価に比べ下落
正常先	時価が取得原価の50%以上下落、又は、時価が取得原価の30%超50%未満下落かつ市場価格が一定水準以下で推移等

なお、要注意先とは今後管理に注意を要する債務者であり、正常先とは、破綻先、実質破綻先、破綻懸念先及び要注意先以外の債務者であります。

(追加情報)

変動利付国債の時価については、従来、市場価格をもって連結貸借対照表計上額としておりましたが、昨今の市場環境を踏まえた検討の結果、市場価格を時価とみなせない銘柄を当社の基準により判断し、当連結会計年度から合理的に算定された価額をもって連結貸借対照表計上額としております。これにより、市場価格をもって連結貸借対照表価額とした場合に比べ、「有価証券」は12,686百万円増加、「繰延税金資産」は5,124百万円減少、「その他有価証券評価差額金」は7,562百万円増加しております。

なお、変動利付国債の合理的に算定された価額は、国債の利回り等から見積もった将来キャッシュ・フローを、同利回りに基づく割引率を用いて割り引くことにより算定しており、国債の利回り及び同利回りのボラティリティが主な価格決定変数であります。

4. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券（自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日）

	売却額（百万円）	売却益の合計額（百万円）	売却損の合計額（百万円）
その他有価証券	660,522	3,580	2,279

5. 時価評価されていない主な有価証券の内容及び連結貸借対照表計上額（平成21年3月31日現在）

	金額（百万円）
満期保有目的の債券	37,925
非公募事業債	37,925
その他有価証券	234,673
非上場株式	29,459
非上場外国証券	0
その他	205,213

6. 保有目的を変更した有価証券  
該当ありません。

7. その他有価証券のうち満期があるもの及び満期保有目的の債券の償還予定額（平成21年3月31日現在）

	1年以内 （百万円）	1年超5年以内 （百万円）	5年超10年以内 （百万円）	10年超 （百万円）
債券	168,626	703,755	421,980	135,387
国債	73,682	232,077	275,576	134,617
地方債	24,810	152,349	83,683	—
社債	70,133	319,328	62,720	769
その他	13,479	27,185	33,731	17,283
合計	182,106	730,941	455,712	152,670

II 当連結会計年度

1. 売買目的有価証券（平成22年3月31日現在）

	当連結会計年度の損益に含まれた評価差額（百万円）
売買目的有価証券	30

2. 満期保有目的の債券（平成22年3月31日現在）

	種類	連結貸借対照表 計上額（百万円）	時価 （百万円）	差額 （百万円）
時価が連結貸借対照表 計上額を超えるもの	国債	16,409	16,855	445
	社債	37,816	38,292	476
	その他	—	—	—
	小計	54,225	55,147	922
時価が連結貸借対照表 計上額を超えないもの	国債	—	—	—
	社債	12,943	12,849	△93
	その他	6,659	6,622	△36
	小計	19,602	19,472	△130
合計		73,827	74,619	791

3. その他有価証券 (平成22年3月31日現在)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	株式	59,774	49,197	10,577
	債券	1,390,982	1,370,681	20,301
	国債	690,918	681,188	9,730
	地方債	368,713	362,676	6,036
	社債	331,351	326,816	4,534
	その他	76,134	74,954	1,179
	小計	1,526,892	1,494,833	32,058
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	株式	47,918	59,447	△11,529
	債券	328,862	330,371	△1,509
	国債	236,092	237,206	△1,114
	地方債	46,500	46,633	△133
	社債	46,269	46,530	△261
	その他	109,662	114,664	△5,002
	小計	486,442	504,483	△18,040
合計		2,013,335	1,999,316	14,018

4. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	4,214	888	521
債券	1,275,822	5,560	1,341
国債	1,171,022	4,129	1,324
地方債	37,548	498	14
社債	67,251	932	3
その他	6,560	87	1,077
合計	1,286,597	6,536	2,940

5. 保有目的を変更した有価証券  
該当ありません。

6. 減損処理を行った有価証券

その他有価証券で時価のあるもののうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当連結会計年度の損失として処理（以下「減損処理」という）しております。

当連結会計年度における減損処理額は、2,069百万円（株式1,759百万円、その他309百万円）であります。

また、「減損処理」は、資産の自己査定における有価証券の発行会社の区分ごとに次のとおり実施しております。

破綻先、実質破綻先、 破綻懸念先、要注意先	時価が取得原価に比べ下落
正常先	時価が取得原価の50%以上下落、又は、時価が取得原価の30%超50%未満下落かつ市場価格が一定水準以下で推移等

なお、要注意先とは今後管理に注意を要する債務者であり、正常先とは、破綻先、実質破綻先、破綻懸念先及び要注意先以外の債務者であります。

(金銭の信託関係)

I 前連結会計年度

1. 運用目的の金銭の信託 (平成21年3月31日現在)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	当連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭の信託	3,852	5

2. 満期保有目的の金銭の信託 (平成21年3月31日現在)

該当ありません。

3. その他の金銭の信託 (運用目的及び満期保有目的以外) (平成21年3月31日現在)

	取得原価 (百万円)	連結貸借対照表計上額 (百万円)	評価差額 (百万円)	うち益 (百万円)	うち損 (百万円)
その他の金銭の信託	900	899	△0	—	0

(注) 1. 連結貸借対照表計上額は、当連結会計年度末日における市場価格等に基づく時価により計上したものであります。

2. 「うち益」「うち損」はそれぞれ「評価差額」の内訳であります。

II 当連結会計年度

1. 運用目的の金銭の信託 (平成22年3月31日現在)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	当連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭の信託	4,000	32

2. 満期保有目的の金銭の信託 (平成22年3月31日現在)

該当ありません。

3. その他の金銭の信託 (運用目的及び満期保有目的以外) (平成22年3月31日現在)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)	うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの (百万円)	うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの (百万円)
その他の金銭の信託	400	400	0	0	—

(注) 1. 連結貸借対照表計上額は、当連結会計年度末日における市場価格等に基づく時価により計上したものであります。

2. 「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの」「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

(その他有価証券評価差額金)

I 前連結会計年度

○その他有価証券評価差額金 (平成21年3月31日現在)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

	金額 (百万円)
評価差額	△27,935
その他有価証券	△27,934
その他の金銭の信託	△0
(+) 繰延税金資産 (又は (△) 繰延税金負債)	9,615
その他有価証券評価差額金 (持分相当額調整前)	△18,320
(△) 少数株主持分相当額	0
(+) 持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	△21
その他有価証券評価差額金	△18,341

II 当連結会計年度

○その他有価証券評価差額金（平成22年3月31日現在）

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

	金額（百万円）
評価差額	14,018
その他有価証券	14,018
その他の金銭の信託	0
(+) 繰延税金資産（又は（△）繰延税金負債）	△4,900
その他有価証券評価差額金（持分相当額調整前）	9,118
(△) 少数株主持分相当額	12
(+) 持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	75
その他有価証券評価差額金	9,180

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

株式会社北陸銀行では、確定給付型の制度として、企業年金制度、適格退職年金制度及び退職一時金制度を設けております。従業員の退職時に際しては、退職給付会計に準拠した数理計算による退職給付債務の対象とされない割増退職金を支払う場合があります。なお、株式会社北陸銀行では、厚生労働大臣から、平成15年2月17日に厚生年金基金の代行部分について将来分支給義務免除の認可を受け、平成17年3月1日には厚生年金基金から企業年金基金への移行の認可を受けております。

株式会社北海道銀行では、確定給付型の制度として、退職一時金制度と企業年金制度を併用しております。なお、株式会社北海道銀行では、平成16年3月26日に厚生労働大臣から将来分支給義務免除の認可を受け、平成18年3月31日に厚生年金基金から企業年金基金への移行の認可を受けております。

上記2社以外の国内の連結子会社では、退職一時金制度を設けております。

当社の従業員は、全員子会社からの出向者であり、それぞれ出向元の会社の退職給付制度が適用されております。

なお、株式会社北陸銀行及び株式会社北海道銀行は、退職給付信託を設定しております。

2. 退職給付債務に関する事項

区分	前連結会計年度 (平成21年3月31日)	当連結会計年度 (平成22年3月31日)
	金額（百万円）	金額（百万円）
退職給付債務 (A)	△93,095	△92,643
年金資産 (B)	48,736	58,473
未積立退職給付債務 (C) = (A) + (B)	△44,359	△34,170
会計基準変更時差異の未処理額 (D)	11,369	9,474
未認識数理計算上の差異 (E)	28,695	19,055
未認識過去勤務債務 (F)	△2,504	△1,251
連結貸借対照表計上額純額 (G) = (C) + (D) + (E) + (F)	△6,799	△6,892
前払年金費用 (H)	2,161	1,260
退職給付引当金 (G) - (H)	△8,960	△8,153

(注) 1. 臨時に支払う割増退職金は含めておりません。

2. 銀行業を営む連結子会社以外の連結子会社は、退職給付債務の算定に当たり、簡便法を採用しております。

3. 退職給付費用に関する事項

区分	前連結会計年度 (平成21年3月31日)	当連結会計年度 (平成22年3月31日)
	金額(百万円)	金額(百万円)
勤務費用	1,930	2,109
利息費用	2,103	2,097
期待運用収益	△2,072	△1,826
過去勤務債務の費用処理額	△1,997	△1,252
数理計算上の差異の費用処理額	2,569	4,341
会計基準変更時差異の費用処理額	1,900	1,894
その他(臨時に支払った割増退職金等)	202	152
退職給付費用	<u>4,635</u>	<u>7,517</u>

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、一括して「勤務費用」に含めて計上しております。

4. 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

区分	前連結会計年度 (平成21年3月31日)	当連結会計年度 (平成22年3月31日)
(1) 割引率	2.0%~2.5%	同左
(2) 期待運用収益率	3.5%~4.0%	同左
(3) 退職給付見込額の期間配分方法	期間定額基準	同左
(4) 過去勤務債務の額の処理年数	8年又は9年(その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数による定額法による)	同左
(5) 数理計算上の差異の処理年数	8年又は9年(各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数による定額法により按分した額を、それぞれ発生の際連結会計年度から費用処理することとしている)	同左
(6) 会計基準変更時差異の処理年数	15年	同左

(税効果会計関係)

前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)																																																																		
<p>1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <table border="0"> <tr> <td colspan="2">繰延税金資産</td> </tr> <tr> <td>貸倒引当金損金算入限度超過額</td> <td style="text-align: right;">69,534百万円</td> </tr> <tr> <td>減価償却損金算入限度超過額</td> <td style="text-align: right;">1,971百万円</td> </tr> <tr> <td>退職給付引当金</td> <td style="text-align: right;">15,901百万円</td> </tr> <tr> <td>有価証券評価損否認額</td> <td style="text-align: right;">14,567百万円</td> </tr> <tr> <td>その他有価証券評価差額</td> <td style="text-align: right;">9,615百万円</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">4,828百万円</td> </tr> <tr> <td>繰越欠損金</td> <td style="text-align: right;">33,433百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産小計</td> <td style="text-align: right;">149,852百万円</td> </tr> <tr> <td>評価性引当額</td> <td style="text-align: right;">49,974百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産合計</td> <td style="text-align: right;">99,878百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">繰延税金負債</td> </tr> <tr> <td>連結有価証券簿価修正</td> <td style="text-align: right;">4,730百万円</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">1,756百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金負債合計</td> <td style="text-align: right;">6,486百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産の純額</td> <td style="text-align: right;">93,391百万円</td> </tr> </table>	繰延税金資産		貸倒引当金損金算入限度超過額	69,534百万円	減価償却損金算入限度超過額	1,971百万円	退職給付引当金	15,901百万円	有価証券評価損否認額	14,567百万円	その他有価証券評価差額	9,615百万円	その他	4,828百万円	繰越欠損金	33,433百万円	繰延税金資産小計	149,852百万円	評価性引当額	49,974百万円	繰延税金資産合計	99,878百万円	繰延税金負債		連結有価証券簿価修正	4,730百万円	その他	1,756百万円	繰延税金負債合計	6,486百万円	繰延税金資産の純額	93,391百万円	<p>1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <table border="0"> <tr> <td colspan="2">繰延税金資産</td> </tr> <tr> <td>貸倒引当金損金算入限度超過額</td> <td style="text-align: right;">68,614百万円</td> </tr> <tr> <td>減価償却損金算入限度超過額</td> <td style="text-align: right;">1,783百万円</td> </tr> <tr> <td>退職給付引当金</td> <td style="text-align: right;">17,291百万円</td> </tr> <tr> <td>有価証券評価損否認額</td> <td style="text-align: right;">13,695百万円</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">5,599百万円</td> </tr> <tr> <td>繰越欠損金</td> <td style="text-align: right;">27,405百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産小計</td> <td style="text-align: right;">134,390百万円</td> </tr> <tr> <td>評価性引当額</td> <td style="text-align: right;">42,388百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産合計</td> <td style="text-align: right;">92,002百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">繰延税金負債</td> </tr> <tr> <td>その他有価証券評価差額</td> <td style="text-align: right;">4,900百万円</td> </tr> <tr> <td>連結有価証券簿価修正</td> <td style="text-align: right;">5,122百万円</td> </tr> <tr> <td>合併引継土地</td> <td style="text-align: right;">3,672百万円</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">3,401百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金負債合計</td> <td style="text-align: right;">17,096百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産の純額</td> <td style="text-align: right;">74,906百万円</td> </tr> </table>	繰延税金資産		貸倒引当金損金算入限度超過額	68,614百万円	減価償却損金算入限度超過額	1,783百万円	退職給付引当金	17,291百万円	有価証券評価損否認額	13,695百万円	その他	5,599百万円	繰越欠損金	27,405百万円	繰延税金資産小計	134,390百万円	評価性引当額	42,388百万円	繰延税金資産合計	92,002百万円	繰延税金負債		その他有価証券評価差額	4,900百万円	連結有価証券簿価修正	5,122百万円	合併引継土地	3,672百万円	その他	3,401百万円	繰延税金負債合計	17,096百万円	繰延税金資産の純額	74,906百万円
繰延税金資産																																																																			
貸倒引当金損金算入限度超過額	69,534百万円																																																																		
減価償却損金算入限度超過額	1,971百万円																																																																		
退職給付引当金	15,901百万円																																																																		
有価証券評価損否認額	14,567百万円																																																																		
その他有価証券評価差額	9,615百万円																																																																		
その他	4,828百万円																																																																		
繰越欠損金	33,433百万円																																																																		
繰延税金資産小計	149,852百万円																																																																		
評価性引当額	49,974百万円																																																																		
繰延税金資産合計	99,878百万円																																																																		
繰延税金負債																																																																			
連結有価証券簿価修正	4,730百万円																																																																		
その他	1,756百万円																																																																		
繰延税金負債合計	6,486百万円																																																																		
繰延税金資産の純額	93,391百万円																																																																		
繰延税金資産																																																																			
貸倒引当金損金算入限度超過額	68,614百万円																																																																		
減価償却損金算入限度超過額	1,783百万円																																																																		
退職給付引当金	17,291百万円																																																																		
有価証券評価損否認額	13,695百万円																																																																		
その他	5,599百万円																																																																		
繰越欠損金	27,405百万円																																																																		
繰延税金資産小計	134,390百万円																																																																		
評価性引当額	42,388百万円																																																																		
繰延税金資産合計	92,002百万円																																																																		
繰延税金負債																																																																			
その他有価証券評価差額	4,900百万円																																																																		
連結有価証券簿価修正	5,122百万円																																																																		
合併引継土地	3,672百万円																																																																		
その他	3,401百万円																																																																		
繰延税金負債合計	17,096百万円																																																																		
繰延税金資産の純額	74,906百万円																																																																		
<p>2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳</p> <table border="0"> <tr> <td>法定実効税率</td> <td style="text-align: right;">40.43%</td> </tr> <tr> <td>(調整)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>評価性引当額の増減</td> <td style="text-align: right;">△111.25%</td> </tr> <tr> <td>受取配当金等永久に益金に算入されない項目</td> <td style="text-align: right;">△0.66%</td> </tr> <tr> <td>住民税均等割額</td> <td style="text-align: right;">0.72%</td> </tr> <tr> <td>交際費等永久に損金に算入されない項目</td> <td style="text-align: right;">0.85%</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">3.62%</td> </tr> <tr> <td>税効果会計適用後の法人税等の負担率</td> <td style="text-align: right;">△66.29%</td> </tr> </table>	法定実効税率	40.43%	(調整)		評価性引当額の増減	△111.25%	受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.66%	住民税均等割額	0.72%	交際費等永久に損金に算入されない項目	0.85%	その他	3.62%	税効果会計適用後の法人税等の負担率	△66.29%	<p>2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳</p> <p>法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため、注記を省略しております。</p>																																																		
法定実効税率	40.43%																																																																		
(調整)																																																																			
評価性引当額の増減	△111.25%																																																																		
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.66%																																																																		
住民税均等割額	0.72%																																																																		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.85%																																																																		
その他	3.62%																																																																		
税効果会計適用後の法人税等の負担率	△66.29%																																																																		

(企業結合等関係)

当連結会計年度(自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)

共通支配下の取引等

1. 結合当事企業の名称及び事業の内容、企業結合の法的形式、結合後企業の名称並びに取引の目的を含む取引の概要

(1) 結合当事企業の名称及びその事業の内容

① 結合企業 名称 株式会社北陸銀行(当社の連結子会社)  
事業の内容 銀行業

② 被結合企業 名称 北銀不動産サービス株式会社(当社の連結子会社)  
事業の内容 不動産賃貸・管理業

(2) 企業結合の法的形式

株式会社北陸銀行を存続会社とし、北銀不動産サービス株式会社を消滅会社とする吸収合併

(3) 結合後企業の名称

株式会社北陸銀行

(4) 取引の目的を含む取引の概要

当社グループにおける経営資源の集中と経営の効率化を図る目的で、株式会社北陸銀行が北銀不動産サービス株式会社を吸収合併したものであります。

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に係る会計基準」(企業会計審議会平成15年10月31日)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第10号平成19年11月15日公表分)に基づき、共通支配下の取引として処理しております。

(セグメント情報)

a. 事業の種類別セグメント情報

前連結会計年度(自平成20年4月1日 至平成21年3月31日)

	銀行業務 (百万円)	リース業務 (百万円)	その他の業務 (百万円)	計 (百万円)	消去又は全社 (百万円)	連結 (百万円)
I 経常収益						
(1) 外部顧客に対する経常収益	217,075	14,224	8,348	239,648	—	239,648
(2) セグメント間の内部経常収益	1,461	1,228	6,515	9,206	9,206	—
計	218,536	15,453	14,864	248,854	9,206	239,648
経常費用	200,515	14,945	12,886	228,348	10,099	218,249
経常利益	18,020	507	1,977	20,505	△893	21,399
II 資産、減価償却費、減損損失 及び資本的支出						
資産	9,937,253	39,946	139,521	10,116,721	187,635	9,929,086
減価償却費	6,641	167	327	7,135	—	7,135
減損損失	9	—	5	14	—	14
資本的支出	13,939	0	455	14,395	—	14,395

(注) 1. 事業の種類は、連結会社の事業の種類により、銀行業務、リース業務、その他の業務に区分しております。

2. 各事業の主な内容

(1) 銀行業務 銀行業務

(2) リース業務 リース業務

(3) その他の業務 クレジットカード業務、信用保証業務、ソフトウェア業務等

3. 一般企業の売上高及び営業利益に代えて、それぞれ経常収益及び経常利益を記載しております。

4. 会計処理方法の変更

所有権移転外ファイナンス・リース取引については、従来、賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっておりましたが、「リース取引に関する会計基準」(企業会計基準第13号平成19年3月30日)及び「リース取引に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第16号同前)が平成20年4月1日以後開始する連結会計年度から適用されることになったことに伴い、当連結会計年度から同会計基準及び適用指針を適用しております。これによるセグメント情報に与える影響については、軽微であります。

当連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

	銀行業務 (百万円)	リース業務 (百万円)	その他の業務 (百万円)	計 (百万円)	消去又は全社 (百万円)	連結 (百万円)
<b>I 経常収益</b>						
(1) 外部顧客に対する経常収益	206,181	12,876	7,700	226,758	—	226,758
(2) セグメント間の内部経常収益	1,135	952	5,235	7,322	7,322	—
計	207,316	13,828	12,936	234,081	7,322	226,758
経常費用	173,313	13,451	12,622	199,387	8,042	191,344
経常利益	34,002	377	313	34,693	△719	35,413
<b>II 資産、減価償却費、減損損失及び資本的支出</b>						
資産	10,083,727	35,266	125,908	10,244,901	137,693	10,107,208
減価償却費	7,848	88	294	8,231	—	8,231
減損損失	223	—	108	331	—	331
資本的支出	10,050	15	120	10,186	—	10,186

(注) 1. 事業の種類は、連結会社の事業の種類により、銀行業務、リース業務、その他の業務に区分しております。

2. 各事業の主な内容

- (1) 銀行業務            銀行業務
- (2) リース業務        リース業務
- (3) その他の業務      クレジットカード業務、信用保証業務、ソフトウェア業務等

3. 一般企業の売上高及び営業利益に代えて、それぞれ経常収益及び経常利益を記載しております。

b. 所在地別セグメント情報

前連結会計年度(自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)及び当連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

全セグメントの経常収益の合計及び全セグメントの資産の金額の合計額に占める本邦の割合が90%を超えているため、所在地別セグメント情報の記載を省略しております。

c. 国際業務経常収益

前連結会計年度(自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)及び当連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

一般企業の海外売上高に代えた国際業務経常収益が連結経常収益の10%未満のため、国際業務経常収益の記載を省略しております。

(1株当たり情報)

		前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
1株当たり純資産額	円	234.56	256.94
1株当たり当期純利益金額	円	24.91	12.66
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	円	22.79	12.14

(注) 1. 当連結会計年度中に公的資金を完済(優先株式の自己株式取得及び消却)しており、当連結会計年度末現在では潜在株式は存在していません。

(注) 2. 1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
1株当たり当期純利益金額			
当期純利益	百万円	37,034	19,212
普通株主に帰属しない金額	百万円	2,402	1,611
うち定時株主総会決議による優先配当額	百万円	1,201	805
うち中間優先配当額	百万円	1,201	805
普通株式に係る当期純利益	百万円	34,631	17,600
普通株式の期中平均株式数	千株	1,390,260	1,389,936
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額			
当期純利益調整額	百万円	791	—
うち定時株主総会決議による優先配当額	百万円	395	—
うち中間優先配当額	百万円	395	—
普通株式増加数	千株	163,879	59,642
うち優先株式	千株	163,879	59,642

2. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度末 (平成21年3月31日)	当連結会計年度末 (平成22年3月31日)
純資産の部の合計額	百万円	441,664	412,324
純資産の部の合計額から控除する金額	百万円	115,592	55,303
うち少数株主持分	百万円	676	781
うち優先株式発行金額	百万円	113,714	53,716
うち優先配当額	百万円	1,201	805
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	326,072	357,021
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数	千株	1,390,141	1,389,505

(重要な後発事象)

前連結会計年度(自平成20年4月1日 至平成21年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)

該当ありません。

5. 個別財務諸表  
(1) 貸借対照表

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成21年3月31日)	当事業年度 (平成22年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	※2 9,995	※2 9,740
前払費用	1	1
未収収益	※2 39	※2 3
繰延税金資産	14	14
未収還付法人税等	2,446	3,006
その他	6	6
流動資産合計	12,504	12,773
固定資産		
有形固定資産	※1 1	※1 2
工具、器具及び備品（純額）	1	2
無形固定資産	2	1
商標権	1	0
ソフトウェア	1	0
投資その他の資産	328,653	247,898
関係会社株式	288,641	227,870
関係会社長期貸付金	40,000	20,000
繰延税金資産	11	27
その他	0	0
固定資産合計	328,656	247,902
資産合計	341,161	260,675
<b>負債の部</b>		
流動負債		
預り金	2	2
未払費用	48	13
未払配当金	45	55
未払法人税等	78	78
未払消費税等	12	7
その他	0	0
流動負債合計	187	157
固定負債		
社債	40,000	20,000
役員退職慰労引当金	—	207
その他	27	—
固定負債合計	40,027	20,207
負債合計	40,215	20,365

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成21年3月31日)	当事業年度 (平成22年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	70,895	70,895
資本剰余金		
資本準備金	82,034	82,034
その他資本剰余金	129,963	60,053
資本剰余金合計	211,997	142,088
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	18,487	27,881
利益剰余金合計	18,487	27,881
自己株式	△434	△554
株主資本合計	300,945	240,310
純資産合計	300,945	240,310
負債純資産合計	341,161	260,675

(2) 損益計算書

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
営業収益		
関係会社受取配当金	7,686	5,945
関係会社受入手数料	738	694
営業収益合計	8,424	6,639
営業費用		
販売費及び一般管理費	※1, ※2 644	※1, ※2 643
営業費用合計	644	643
営業利益	7,780	5,995
営業外収益		
関係会社貸付金利息	858	818
その他	21	17
営業外収益合計	879	836
営業外費用		
社債利息	858	822
事務委託費	115	93
営業外費用合計	973	915
経常利益	7,686	5,916
特別利益		
関係会社株式売却益	5,535	10,074
特別利益合計	5,535	10,074
特別損失		
固定資産処分損	—	0
過年度役員退職慰労引当金繰入額	—	145
特別損失合計	—	145
税引前当期純利益	13,221	15,845
法人税、住民税及び事業税	290	289
法人税等調整額	7	△16
法人税等合計	297	273
当期純利益	12,923	15,571

## (3) 株主資本等変動計算書

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
<b>株主資本</b>		
資本金		
前期末残高	70,895	70,895
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	70,895	70,895
資本剰余金		
資本準備金		
前期末残高	162,034	82,034
当期変動額		
資本準備金の取崩	△80,000	—
当期変動額合計	△80,000	—
当期末残高	82,034	82,034
その他資本剰余金		
前期末残高	80,098	129,963
当期変動額		
資本準備金の取崩	80,000	—
自己株式の処分	△25	△6
自己株式の消却	△30,110	△69,903
当期変動額合計	49,864	△69,909
当期末残高	129,963	60,053
資本剰余金合計		
前期末残高	242,133	211,997
当期変動額		
自己株式の処分	△25	△6
自己株式の消却	△30,110	△69,903
当期変動額合計	△30,135	△69,909
当期末残高	211,997	142,088
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金		
前期末残高	11,617	18,487
当期変動額		
剰余金の配当	△6,053	△6,178
当期純利益	12,923	15,571
当期変動額合計	6,870	9,393
当期末残高	18,487	27,881
利益剰余金合計		
前期末残高	11,617	18,487
当期変動額		
剰余金の配当	△6,053	△6,178
当期純利益	12,923	15,571
当期変動額合計	6,870	9,393
当期末残高	18,487	27,881

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
<b>自己株式</b>		
前期末残高	△386	△434
当期変動額		
自己株式の取得	△30,232	△70,039
自己株式の処分	72	17
自己株式の消却	30,110	69,903
当期変動額合計	△48	△119
当期末残高	△434	△554
<b>株主資本合計</b>		
前期末残高	324,259	300,945
当期変動額		
剰余金の配当	△6,053	△6,178
当期純利益	12,923	15,571
自己株式の取得	△30,232	△70,039
自己株式の処分	47	11
当期変動額合計	△23,314	△60,635
当期末残高	300,945	240,310
<b>純資産合計</b>		
前期末残高	324,259	300,945
当期変動額		
剰余金の配当	△6,053	△6,178
当期純利益	12,923	15,571
自己株式の取得	△30,232	△70,039
自己株式の処分	47	11
当期変動額合計	△23,314	△60,635
当期末残高	300,945	240,310

(4) 継続企業の前提に関する注記

該当事項はありません。

(5) 重要な会計方針

	前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
1. 有価証券の評価基準及び評価方法	有価証券の評価は、子会社株式及び関連会社株式については、移動平均法による原価法により行っております。	同左
2. 固定資産の減価償却の方法	(1) 有形固定資産 有形固定資産については定率法を採用しております。 なお、主な耐用年数は次のとおりであります。 器具及び備品 : 5年～10年 (2) 無形固定資産 ① 商標権については、10年間の均等償却を採用しております。 ② 自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法により償却しております。	(1) 有形固定資産 同左  (2) 無形固定資産 同左
3. 役員退職慰労引当金の計上基準	—————	役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当事業年度末までに発生していると認められる額を計上しております。 (追加情報) 当社設立時から、当社の財務状況や公的資金の導入を鑑み、社外役員以外の役員に対する退職慰労金の支給を見送ってまいりましたが、財務状況が着実に改善し平成21年8月の公的資金の返済を終えましたことから、社外役員以外の取締役及び監査役に対する役員退職慰労引当金を当事業年度から計上しております。
4. リース取引の処理方法	所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年4月1日前に開始する事業年度に属するものについては、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。	同左
5. 消費税等の会計処理	消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。	同左

(6) 会計方針の変更

前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
—————	
<p>(リース取引に関する会計基準)</p> <p>所有権移転外ファイナンス・リース取引については、従来、賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっておりましたが、「リース取引に関する会計基準」(企業会計基準第13号平成19年3月30日)及び「リース取引に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第16号同前)が平成20年4月1日以後開始する事業年度から適用されることになったことに伴い、当事業年度から同会計基準及び適用指針を適用しております。</p> <p>これによる、貸借対照表及び損益計算書に与える影響はありません。</p>	

(7) 表示方法の変更

前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
—————	
<p>(貸借対照表)</p> <p>前事業年度末まで、「固定負債」の「その他」に含めて表示しておりました「役員退職慰労引当金」は、当事業年度末において重要性が増したため区分掲記しております。なお、前事業年度末の「役員退職慰労引当金」は27百万円であります。</p>	

(8) 注記事項

(貸借対照表関係)

前事業年度 (平成21年3月31日)	当事業年度 (平成22年3月31日)
<p>※1. 有形固定資産の減価償却累計額 5百万円</p> <p>※2. 関係会社に対する債権</p> <p style="padding-left: 20px;">預金 9,984百万円</p> <p style="padding-left: 20px;">未収収益 39百万円</p> <p>3. 配当制限</p> <p>当社の定款の定めるところにより、優先株主に対しては、次に定める各種優先株式の優先配当金を超えて配当することはありません。</p> <p style="padding-left: 20px;">第1種優先株式 1株につき37円50銭</p> <p style="padding-left: 20px;">第2種優先株式 1株につき37円50銭</p> <p style="padding-left: 20px;">第3種優先株式 1株につき50円00銭</p> <p style="padding-left: 20px;">第4種優先株式 1株につき37円50銭</p> <p style="padding-left: 20px;">第5種優先株式 1株につき50円00銭</p>	<p>※1. 有形固定資産の減価償却累計額 6百万円</p> <p>※2. 関係会社に対する債権</p> <p style="padding-left: 20px;">預金 9,725百万円</p> <p style="padding-left: 20px;">未収収益 3百万円</p> <p>3. 配当制限 同左</p>

(損益計算書関係)

前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
<p>※1. 営業費用のうち関係会社との取引</p> <p style="padding-left: 20px;">一般管理費 351百万円</p> <p>※2. 販売費及び一般管理費のうち、主要なものは次のとおりであります。なお、全額が一般管理費に属するものであります。</p> <p style="padding-left: 20px;">事務協力費 346百万円</p> <p style="padding-left: 20px;">役員報酬 108百万円</p> <p style="padding-left: 20px;">消耗品費 39百万円</p> <p style="padding-left: 20px;">租税公課 35百万円</p>	<p>※1. 営業費用のうち関係会社との取引</p> <p style="padding-left: 20px;">一般管理費 337百万円</p> <p>※2. 販売費及び一般管理費のうち、主要なものは次のとおりであります。なお、全額が一般管理費に属するものであります。</p> <p style="padding-left: 20px;">事務協力費 332百万円</p> <p style="padding-left: 20px;">役員報酬 106百万円</p> <p style="padding-left: 20px;">消耗品費 36百万円</p> <p style="padding-left: 20px;">租税公課 35百万円</p>

(株主資本等変動計算書関係)

## I 前事業年度(自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	前事業年度末 株式数(千株)	当事業年度増加 株式数(千株)	当事業年度減少 株式数(千株)	当事業年度末 株式数(千株)	摘要
普通株式	1,050	498	208	1,339	注1
第1回第1種優先株式	—	30,000	30,000	—	注2
第1回第4種優先株式	—	17,600	17,600	—	注2
合計	1,050	48,098	47,808	1,339	

(注) 1. 普通株式の自己株式の株式数の増加498千株は、単元未満株式の買取りによる増加、減少208千株は、単元未満株主からの売渡請求による減少であります。

2. 第1回第1種優先株式の自己株式の株式数の増加及び減少30,000千株並びに第1回第4種優先株式の自己株式の株式数の増加及び減少17,600千株は、それぞれの優先株式の一部取得及び消却であります。

## II 当事業年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	前事業年度末 株式数(千株)	当事業年度増加 株式数(千株)	当事業年度減少 株式数(千株)	当事業年度末 株式数(千株)	摘要
普通株式	1,339	694	57	1,976	注1
第1回第1種優先株式	—	50,000	50,000	—	注2
第1回第4種優先株式	—	61,400	61,400	—	注2
合計	1,339	112,094	111,457	1,976	

(注) 1. 普通株式の自己株式の株式数の増加694千株は、単元未満株式の買取りによる増加、減少57千株は、単元未満株主からの売渡請求による減少であります。

2. 第1回第1種優先株式の自己株式の株式数の増加及び減少50,000千株並びに第1回第4種優先株式の自己株式の株式数の増加及び減少61,400千株は、それぞれの優先株式の取得及び消却であります。

(リース取引関係)

前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)																												
1. 所有権移転外ファイナンス・リース取引 該当ありません。	1. 所有権移転外ファイナンス・リース取引 該当ありません。																												
2. 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引 (1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額、減損損失累計額相当額及び期末残高相当額	2. 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引 (1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額、減損損失累計額相当額及び期末残高相当額																												
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th style="text-align: center;">取得価額相当額 (百万円)</th> <th style="text-align: center;">減価償却累計額相当額 (百万円)</th> <th style="text-align: center;">期末残高相当額 (百万円)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>工具、器具及び備品</td> <td style="text-align: center;">8</td> <td style="text-align: center;">4</td> <td style="text-align: center;">3</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">-</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: center;">8</td> <td style="text-align: center;">4</td> <td style="text-align: center;">3</td> </tr> </tbody> </table>		取得価額相当額 (百万円)	減価償却累計額相当額 (百万円)	期末残高相当額 (百万円)	工具、器具及び備品	8	4	3	その他	-	-	-	合計	8	4	3	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th style="text-align: center;">取得価額相当額 (百万円)</th> <th style="text-align: center;">減価償却累計額相当額 (百万円)</th> <th style="text-align: center;">期末残高相当額 (百万円)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>有形固定資産</td> <td style="text-align: center;">8</td> <td style="text-align: center;">5</td> <td style="text-align: center;">2</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: center;">8</td> <td style="text-align: center;">5</td> <td style="text-align: center;">2</td> </tr> </tbody> </table>		取得価額相当額 (百万円)	減価償却累計額相当額 (百万円)	期末残高相当額 (百万円)	有形固定資産	8	5	2	合計	8	5	2
	取得価額相当額 (百万円)	減価償却累計額相当額 (百万円)	期末残高相当額 (百万円)																										
工具、器具及び備品	8	4	3																										
その他	-	-	-																										
合計	8	4	3																										
	取得価額相当額 (百万円)	減価償却累計額相当額 (百万円)	期末残高相当額 (百万円)																										
有形固定資産	8	5	2																										
合計	8	5	2																										
(2) 未経過リース料期末残高相当額	(2) 未経過リース料期末残高相当額																												
<table style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 80%;">1年内</td> <td style="text-align: right;">1百万円</td> </tr> <tr> <td>1年超</td> <td style="text-align: right;">3百万円</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">4百万円</td> </tr> </table>	1年内	1百万円	1年超	3百万円	合計	4百万円	<table style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 80%;">1年内</td> <td style="text-align: right;">1百万円</td> </tr> <tr> <td>1年超</td> <td style="text-align: right;">1百万円</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td style="text-align: right;">3百万円</td> </tr> </table>	1年内	1百万円	1年超	1百万円	合計	3百万円																
1年内	1百万円																												
1年超	3百万円																												
合計	4百万円																												
1年内	1百万円																												
1年超	1百万円																												
合計	3百万円																												
(3) 支払リース料、リース資産減損勘定の取崩額、減価償却費相当額、支払利息相当額及び減損損失	(3) 支払リース料、リース資産減損勘定の取崩額、減価償却費相当額、支払利息相当額及び減損損失																												
<table style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 80%;">支払リース料</td> <td style="text-align: right;">1百万円</td> </tr> <tr> <td>減価償却費相当額</td> <td style="text-align: right;">1百万円</td> </tr> <tr> <td>支払利息相当額</td> <td style="text-align: right;">0百万円</td> </tr> </table>	支払リース料	1百万円	減価償却費相当額	1百万円	支払利息相当額	0百万円	<table style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 80%;">支払リース料</td> <td style="text-align: right;">1百万円</td> </tr> <tr> <td>減価償却費相当額</td> <td style="text-align: right;">1百万円</td> </tr> <tr> <td>支払利息相当額</td> <td style="text-align: right;">0百万円</td> </tr> </table>	支払リース料	1百万円	減価償却費相当額	1百万円	支払利息相当額	0百万円																
支払リース料	1百万円																												
減価償却費相当額	1百万円																												
支払利息相当額	0百万円																												
支払リース料	1百万円																												
減価償却費相当額	1百万円																												
支払利息相当額	0百万円																												
(4) 減価償却費相当額の算定方法	(4) 減価償却費相当額の算定方法																												
リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。	リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。																												
(5) 利息相当額の算定方法	(5) 利息相当額の算定方法																												
リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各期への配分方法については、利息法によっております。	リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各期への配分方法については、利息法によっております。																												
(減損損失について) リース資産に配分された減損損失はありません。	(減損損失について) リース資産に配分された減損損失はありません。																												

(有価証券関係)

前事業年度(自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)及び当事業年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式で時価のあるものはありません。

(税効果会計関係)

前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳	1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳
繰延税金資産	繰延税金資産
未払事業税否認	役員退職慰労引当金
14百万円	84百万円
その他	未払事業税否認
11百万円	14百万円
繰延税金資産合計	繰延税金資産小計
26百万円	98百万円
	評価性引当額
	56百万円
	繰延税金資産合計
	42百万円
2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳	2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳
法定実効税率	法定実効税率
40.43%	40.43%
(調整)	(調整)
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	受取配当金等永久に益金に算入されない項目
△38.19%	△39.07%
その他	その他
0.01%	0.36%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	税効果会計適用後の法人税等の負担率
2.25%	1.72%

## (1株当たり情報)

		前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
1株当たり純資産額	円	133.80	133.69
1株当たり当期純利益金額	円	7.56	10.04
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	円	7.27	9.62

(注) 1. 当事業年度中に公的資金を完済（優先株式の自己株式取得及び消却）しており、当事業年度末現在では潜在株式は存在していません。

2. 1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前事業年度 (自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日)	当事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)
1株当たり当期純利益金額			
当期純利益	百万円	12,923	15,571
普通株主に帰属しない金額	百万円	2,402	1,611
うち定時株主総会決議による優先配当額	百万円	1,201	805
うち中間優先配当額	百万円	1,201	805
普通株式に係る当期純利益	百万円	10,520	13,960
普通株式の期中平均株式数	千株	1,390,409	1,390,085
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額			
当期純利益調整額	百万円	791	—
うち定時株主総会決議による優先配当額	百万円	395	—
うち中間優先配当額	百万円	395	—
普通株式増加数	千株	163,879	59,642
うち優先株式	千株	163,879	59,642

3. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前事業年度末 (平成21年3月31日)	当事業年度末 (平成22年3月31日)
純資産の部の合計額	百万円	300,945	240,310
純資産の部の合計額から控除する金額	百万円	114,915	54,521
うち優先株式発行金額	百万円	113,714	53,716
うち優先配当額	百万円	1,201	805
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	186,030	185,788
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数	千株	1,390,290	1,389,653

## (重要な後発事象)

前事業年度（自平成20年4月1日 至平成21年3月31日）

該当ありません。

当事業年度（自平成21年4月1日 至平成22年3月31日）

該当ありません。